2017_11_13 ヲシテ追加
2017_5_30 アヤ(綾)に変更
2015_5_27 はじめに追加
2015_5_22 疑問位置変更
2015_5_13 天成る道訳訂正
2015_4_30 サギリ訳訂正
2014_12_11～4_23 付

ホツマツタヱ講座

ホツマツタヱ 2アヤ(綾) 解説文

ホツマツタヱ研究家 吉田六雄

2アヤ(綾)【件名】

ヲシテ	カナ文字	現在訳
	ホツマツタヱミハタノフ	ホツマツタヱ御旗の二
	アメナナヨトコミキノアヤ	天七代 床酒アヤ(文)

解説文

はじめに

2アヤ(綾)が奉納された年代と、2アヤ(綾)の文節の考察

2アヤ(綾)の「天七代 床酒アヤ(文)」が編纂された年代は、11アヤ(綾)、25鈴100枝(紀元前290年)以降のことと推定されます。

なぜ、このような推測が成り立つかと云いますと、

2アヤ(綾)1 には、「この時に 皇子オシヒトの トツギ前 タカギが御酒の アヤ請えは カミの教ゑは」との記述があります。この文章に関連する内容を全ホツマツタヱより捜しますと、11アヤ(綾)1(1 行目)～7(4 行目)、12アヤ(綾)2(1～4 行目)、19アヤ(綾)B1(2 行目)～19―B2(2 行目)が該当します。その各々の内容は、「皇子オシヒトの トツギ」する前後の内容である(1)婚約が整う、(2)天日嗣、(3)世の日嗣・年代のことが記述されており、2アヤ(綾)の「天七代 床酒アヤ(文)」が編纂された年代は、11アヤ(綾)、25鈴100枝(紀元前290年)以降であることが改めてわかるようです。このように2アヤ(綾)が記述された年代がわかってきますと、今で棒読みしていた2アヤ(綾)が、歴史性を感じて読み下しができるようです。

(1)婚約が整う

11アヤ(綾)1(1 行目)～7(4 行目)より引用しますと、「25鈴100枝11穂」頃に、「国府のタクハタチチ姫と 十二の局も 備われは 宮内の祝ひ 整ひて 神に御告けの」との記述があり、オシヒトの結婚の準備が整ったと記載しているようです。

関連するアヤ(綾)

11アヤ(綾)1(1 行目)～2(1 行目)より引用すると、

フソヰスス	モモヱソヒホニ	25鈴	100枝11穂に
ヒタカミノ	ミクラノアトニ	日高見の	御座の跡に
マタミヤコ	ウツシテナツク	また都	遷して名付く
タカノコフ		多賀の国府	

関連するアヤ(綾)

11アヤ(綾)6(4 行目)～7(4 行目)より引用すると、

	タガノミヤコオ		多賀の都お
ヒキウツシ	カウノタクハタ	引き遷し	国府のタクハタ
チチヒメト	ソフノツホネモ	チチ姫と	十二の局も
ソナワレハ	ミウチノイワヒ	備われは	宮内の祝ひ
トトノヒテ	カミニミツケノ	整ひて	神に御告けの

(2)天日嗣

12アヤ(綾)2(1～4 行目)では、「ヲシホミミ　天つ日嗣は　多賀の国府　タクハタ姫の　宮内入り」の記述がありました。訳文しますと、ヲシホミミ(オシヒト)は、宮城県の多賀の国府にて天日嗣をなされたとのことである。そして、タクハタチチ姫は、ヲシホミミの御后になられるため、国府の宮に入られたと記述しているようです。

関連するアヤ(綾)

12アヤ(綾)2(1～4 行目)より引用すると、

	アマテルミコノ		アマテル(神の)皇子の
ヲシホミミ	アマツヒツギハ	ヲシホミミ	天つ日嗣は
タカノカウ	タクハタヒメノ	多賀の国府	タクハタ姫の
ミウチイリ	ソノサキコシノ	宮内入り	

(3)世の日嗣

そして、国を治める儀式の「世の日嗣」をされたのは、19アヤ(綾)B1(2 行目)～19―B2(2 行目)に、「二十五鈴　百三十枝の　年サナト　春の初日に　世の日嗣　皇子オシヒトに　譲ります　天より伊勢に　降りいます」との記述がありました。

19アヤ(綾)B1(2 行目)～19―B2(2 行目)より引用すると、

フソヰスス	モモミソヱタノ	日嗣	春の初日に
ヨノヒツギ	ミコオシヒトニ	世の日嗣	皇子オシヒトに
ユツリマシ	アメヨリイセニ	譲ります	天より伊勢に
オリイマス		降りいます	

(4)2アヤ(綾)の年代の推定

前述のように、11アヤ(綾)～19アヤ(綾)までの年代は、25鈴100枝11穂～25鈴130枝58穂であり、西暦換算にて、紀元前290年～紀元前289年頃(吉田説)になるようです。

(5)アヤ(綾)、鈴枝の年代と登場する人名

オシヒトが結婚する11アヤ(綾)、12アヤ(綾)は、タカギネ、ワカヒト(アマテル神)、オシヒト、タクハタチチ姫が記述されており、この内、タカギネ、オシヒトが2アヤ(綾)に登場し、またワカヒト(アマテル神)の名は未記述ですが、「カミの教ゑに」と、ワカヒト(アマテル神)が、以前にトヨケより享受された「カミの教ゑ」をチチ姫の父であるタカギネ、花婿のオシヒトに解説したことが充分に考えられます。

詳しくは、下表の「アマカミ(天神)名とアヤ(綾)の関係」を見て下さい。

アマカミ(天神)名とアヤ(綾)の関係　　記入方法:○印は、該当マークを示す。

	鈴_枝	タマキネ	ヤソキネ	タカギネ	ワカヒト	オシヒト	チチ姫	ハナキネ	クシキネ	クシヒコ
4 アヤ	21_125	○	○		○					
5 アヤ								○		
6 アヤ	22_505	○	○	○		○		○		
7 アヤ			○					○		
8 アヤ	24_998				○			○		
9 アヤ								○	○	○
10 アヤ	25_93			○						○
11 アヤ	25_100			○		○	○			
12 アヤ					○	○	○			

ホツマツタヱ本文

2アヤ(綾)1(1 行)～1(3 行)【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
		コノトキニ	ミコオシヒトノ	この時に	皇子オシヒトの
		トツギマエ	タカギガミキノ	トツギ前	タカギが御酒の
		アヤコエハ		アヤ請えは	

語句の解説

・オシヒト→ワカヒトの長子、・トツギ→(昔)トの国の君を嗣ぐこと、・嫁ぎ→(近代)他家に嫁入る

・タカギ→ヤソキネの長子

原文の現在訳

この時に　皇子オシヒトの　トツギ前　タカギが御酒の　アヤ請えは

解説文　(赤文字は、原文の現在訳です。)

日高見の多賀の国府のことです。この時世は、25鈴100枝11穂～25鈴130枝58穂(紀元前290年～紀元前289年頃(吉田説))の頃になります。皇子オシヒトの天御子は、アマテル神より トの国のアマカミ(天神)を日ツギ(嗣)される前のことでした。タクハタチチ姫の父であるタカギ(タカキネ)が、オシヒトの父君であるアマテル神に、御酒のアヤ(綾)を請えはと教えを請われた。アマテル神は、日高見のケタツボのヤマテ宮にて、東の君のトヨケ(豊受神)より、「天御子学ぶ　天の道　一人待(はんべ)る」と、学ばれていた「天の道」を、タカギ、オシヒトに語られたのでした。

2アヤ(綾)1(3 行)～3(1 行)【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
			カミノヲシヱハ		カミの教ゑは
		イニシエノ	アメツチウビノ	古の	天地ウビの
		キハナキニ	キザシワカルル	キハ無きに	兆し別れる
		アウノメオ	オハアメトナリ	アウの陰陽	陽は天となり
		ヒノワナル	メワクニトナリ	日の輪成る	陰は地となり
		ツキトナル		月と成る	

語句の解説

・カミ→古よりのカミの教ゑ、・天地→宇宙と国玉(地球)、・ウビ→「ウ」は泥、古語で「うき」、

・際無し→限りがない。果てしない、兆し→物事が起こりそうな気配。兆候。芽ばえ。芽出し、

・アウ→ア(天)、ウ(泥、大なる)

原文の現在訳

カミの教ゑは　古の　天地ウビの　キハ無きに　兆し別れる　アウの陰陽　陽は天となり　日の輪成る　陰は地となり　月と成る

【疑問】

古代の本には良く アメツチ(天地)が記述されておりますが、ホツマの記述を教えて下さい。

【疑問に応える】

ホツマツタヱには「アメツチ」の言葉が、28ヶ所も記述されておりました。訳としては、「天と地」の意味になるようです。だが、ホツマツタヱの全文を読みますと同じ「天地」でも、前後の文章により「天地」の使われ方も変わり、また意味も変わってくるようです。その用法を大きく分類しますと、

① 神の教ゑ、また誰かが神の教ゑを説く時の「アメツチ(天地)」

② 平穏さや、時空を表す時の「アメツチ(天地)」それに

③ 祈る時の「アメツチ(天地)」

などがあるようです。いずれにしても訳は、①「天と地」、②「宇宙と国玉(地球)」、③「小宇宙」、「全方位の神」などと概念的(大まかに捉えられているさま。)な言葉になるようです。

【神の教、誰かが神の教ゑのアメツチ(天地)】

①2－1　　神の教ゑは、―2　アメツチ(天地)ウビの　際無きに

①11－16　勅り、―21　アメツチ(天地)と　まさに際無し

①12－6　　春日神答えて　これ昔、－6　アメツチ(天地)シロ(治)す

①13－6　　春日神説くなり、－7　みなアメツチ(天地)の　ノリ(法)備ふ

①14－7　　世嗣の文お　織らんとす、－9　天御祖　アメツチ(天地)人も

①15－8　　成りそめお　諸民聞けよ　アメツチ(天地)の　開ける時に

①16－11　ここに子守神の　御種子　アメツチ(天地)未だ　分ざるに

①18－3　　君の教ゑ、－5　生みしは昔　アメツチ(天地)の　アホウビ未だ

①19－A11故はアメツチ(天地)　分かざるに　天の御祖の

①21－8　　そのノト(祝詞)言は　アメツチ(天地)の　開く室屋の

①22－3　　ノト(祝詞)中に　－4　その神は　アメツチ(天地)開け

①27－41　コヤネ申さく、－42　人草の親　アメツチ(天地)の　神も降れば

①28－3　　翁答えて　この鈴は　アメツチ(天地)開く　国常立の

【平穏さ、時空を表すアメツチ(天地)】

②奉呈文－1アメツチ(天地)の　開けし時に　両神の　瓊矛に治める

②14－1　　アメツチ(天地)も　内外も清に

②15－1　　アメツチ(天地)も　のどけき時に

②17－1　アメツチ(天地)も　内外も清く　成る時に
②23－1　アメツチ(天地)も　内外も清く　徹る時
②23－24　アメツチ(天地)去りて　遠ければ　わたくし(私)立つる
②27－37　天つ日嗣の　栄ゑんは　アメツチ(天地)くれど　窮めなきかな
②29－58　わがナガスネは　生まれつき　アメツチ(天地)判ぬ
②37－14　奉る和歌　アメツチ(天地)の　御代の栄ゑお

【祈りのアメツチ(天地)】
③16－73　朝ごとに　アメツチ(天地)祭り
③17－29　再盗み　三度損ひ　アメツチ(天地)人の　見る所　天の御告げは
③17－56　天より君に　告げあるぞ　正に恥ずべし　アメツチ(天地)が　悪さなせそと
③17－76　勅り　人はアメツチ(天地)　象れど　空は高天の　原の内
③29－37　ひもろげに　アメツチ(天地)祀り　後　討たん
③39－35　オトタチバナは　へ(舳)に上がり　アメツチ(天地)祈り

解説文　(赤文字は、原文の現在訳です。)

その「天の道」と云うカミの教ゑは、現在の知識で判断しますと、アマテル神の当時としては、「宇宙観」が語られる先進的な説であったと思われます。また、その宇宙を起源とする中に、アマカミ(天神)の祖先である「カミ(神)」の生まれと、古代日本を国造りされたことを語られていました。その「宇宙観」と「国造り」を、ホツマツタヱ【本文】と訳文を併記しながら、私の流儀で再現しますと、

アマテル神、当時の「宇宙観」

古の　天地ウビの　際無きに　兆し別れる　アウの陰陽　陽は天となり　日の輪成る　陰は地となり　月と成る

訳文

人の初めの天御中主が現れる、遥か古の大宇宙のことです。後に現れる天と地も、未だ蔓延した宇宙ガスが噴出して作る渦巻きの中に埋もれて、混沌たるウビ(泥々)の状態の時でした。ウビ(泥々)の大きさは、際無きに果てしなく大宇宙に広がり、その中に、天と地が現れるそうな兆しや、また双方が互いに離れて去り別るるような気配が続いておりました。アウ(大宇宙)の万物に働く相反する性格の陰陽の陽は、積極的・能動的であるとされる天(銀河系)となり、日の輪(太陽)に成ることになり、また、陰陽の陰は、消極的・受容的とされる地(国玉)となり、更に国玉(地球)より別れた月と成るのでした。

2アヤ(綾)3(1 行)～4(2 行)【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
			カミソノナカニ		カミその中に
		アレマシテ	クニトコタチノ	生れました	国常立の
		トコヨクニ	ヤモヤクタリノ	常世国	八方八降りの
		ミコウミテ	ミナソノクニオ	御子生みて	皆その国お
		ヲサメシム	コレクニキミノ	治めしむ	これ国君の
		ハジメナリ		始めなり	

語句の解説

常世国→茨城県

原文の現在訳

カミその中に　生れました　国常立の　常世国　八方八降りの　御子生みて　皆その国お　治めしむ　これ国君の　始めなり

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

アマカミ(天神)の祖先「カミ(神)」の生まれと国造り

カミその中に　生れまして　国常立の　常世国　八方八降りの　御子生みて　皆その国お　治めしむ　これ国君の　始めなり

訳文

宇宙を起源とする中に、アマカミ(天神)の祖先である「天御中主のカミ(神)」が、その中に生まれまして、その御子である国常立が起こした国の名は常世国と云いました。この常世国は、日本列島における「初の国」でした。国常立は日本全土を治めるため、八方の国（地方）に八降りされることを計画されて、それぞれの国の名である「ト、ホ、カ、ミ、ヱ、ヒ、タ、メ」の八人のクニサツチの御子を生みて　国君の教育を行ったのでした。その御子は成人するや、皆それぞれの国お国君として、治めしむになりました。　これこそが、国君の起こりの始めとなりました。

2アヤ(綾)4(2 行)～5(2 行)【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
			ヨツギノカミハ		世継ぎのカミは
		クニサツチ	サキリノミチオ	クニサツチ	サキリの道お
		ウケサレハ	サツチニヲサム	受けざれは	サツチに治む
		ヤミコカミ	オノオノミコオ	八王子神	各々御子お
		ヤタリウム		五人生む	

語句の解説

・クニサツチ→国の南西の方向の地(吉田説)、

・ち→[語素]指示代名詞の下に付いて、方角・場所・時間などの意を表す。「こ―(此方)」、

・サツチ→南西の方向の地、・サツチ→「南」+「土」

・サキリ→南東の地を離れること(吉田説)、・サキリ→古事記は、狭霧と訳、

・八王子神→クニサッチ。国常立のトホカミヱヒタメの八人の王子。神代二代の神。国君の始祖。

原文の現在訳

世継ぎのカミは　クニサツチ　サキリの道お　受けざれは　サツチに治む　ヤ八王子神　各々御子お　五人生む

【疑問】

クニサツチの称え名に特別な意味がありますか?

【疑問に応える】

クニサツチの本来の意味は、ホツマツタヱには記述されておりませんが、国常立の称え名の意味、また、「ト、ホ、カ、ミ、ヱ、ヒ、タ、メ」の国の方向より、クニサツチの意味を深読みして見ました。この深読みしたプロセスより、次のように、もう少し具体的に解説して見たいと思います。

クニサツチの各々意味であるクニは国、サは南、ツは西に訳できるようです。このことは、ホツマ研究者であれば、誰が考えても同じ答えになるかと思います。難しいのは、次の「チ」です。「チ」の意味を一音節で考えますと、父、地、血などの意味になりますが、「クニサツ」につなげて、「チ」を考えて見ますと、国、南、西、(父、地、血)などになりますが、国南西父は変な名になり、「名は体を表さない」訳になるようです。そこでもう一度、「ト、ホ、カ、ミ、ヱ、ヒ、タ、メ」の国が存在した場所や方角について、ホツマツタヱより捜して見ましたが記述されておりませんでした。更に、父神の国常立の名に何かヒントがないかと捜して見ました。すると、父神の称え名である国常立の名は、「国の常に立つ」→「国を常に盛り立てる主催者」があることを見つけました。そうしますと、クニサツチの名にも、隠れた意味があることが推測され一音節で精査して見ますと、クニサツチ

の真ん中の「サツ」は、一音節で「南西」の意味が隠れておりました。このことより、クニサツチの国である「ト」～「メ」の国は、何処の場所を起点として見た場合に、南西と云っているかが疑問になってきました。このような「サツ」→「南西」の疑問より、もう一度、クニサツチの「チ」について、辞書の訳を見ますと、「チ」には、「あつち」、「こつち」を指す、方角・場所・時間なども含まれていることがわかって来ました。このことより、恐らく国常立は八人の皇子を赴任させるに当たり、常世国より見て「南西の方向にある国」の意味を持つ、「クニサツチ」と名付けたのではないかと思えてきました。

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

国常立が起こした常世国の世を引継ぐ、つぎのカミは、「ト、ホ、カ、ミ、ヱ、ヒ、タ、メ」国の八人のクニサツチになります。そこで国常立は、その八人の皇子を「ト、ホ、カ、ミ、ヱ、ヒ、タ、メ」の国に赴任させるに当たって、称え名（クニサツチ）を贈られることになりました。またその場合は、臣、民でもわかるようにと「名は体を表す」ことを考えなられたようです。そのことは、名付けられた称え名であるクニサツチを見るとわかってくるようです。国常立は八人の皇子の名に、常世国より見て「南西の方向にある国」の意味のクニサツチの名を贈られました。

このようにしてクニサツチと名付け皇子たちは、サキリ（南東の地を離れる）の道お受けざれは、サツ（南西）のチ（方向）にあたるクニサツチの国に就任されて、その国々を治むことになられるヤミコ（八王子）神であった。その八王子神は、各々が御子お　五人も生むなど、国の基本である民の増加にも力を入れられて、その甲斐があって国がだんだんと豊かになってきました。

2アヤ（綾）5（2 行～3 行）【本文】

2アヤ（綾）5（2 行～3 行）【本文】

ヲシテ	カナ文字	現在訳
[illegible]	ヤモノヨツギハ	八方の世継ぎは
[illegible]	トヨクンヌ	トヨクンヌ

語句の解説

・トヨクンヌ→神代の三代目のカミ

原文の現在訳

八方の世継ぎは　トヨクンヌ

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

　その八王子神が治めた「ト、ホ、カ、ミ、ヱ、ヒ、タ、メ」の八方の国々の世継ぎの神は、ヤミコ(八王子)神の各々の五人の皇子であるトヨクンヌになります。 このトヨクンヌシの頃になりますと、国も豊かになったことが称え名に現れているようです。そのことは、トヨクンヌ(シ)のトヨは豊、クンは国、ヌシは主の漢字が当てはまることからも、その意味が称え名として付けられたようです。

2アヤ(綾)5(3 行)～6(3 行)【本文】

ヲシテ	カナ文字	現在訳
	アメヨリミツノ	天より三つの
ワサオワケ	キミトミタミノ	業お分け　君臣民の
ミクタリノ	カミハモフソノ	三降りの　カミは百二十の
ミコアリテ	アメナルミチハ	御子ありて　天成る道は
メモアラス	ミツヨヲサマル	女もあらず　三代治まる

語句の解説

・アメ(天)より→上位に位置する言葉、・ワサ(業)→身分、階級、

・天成る道→国常立・クニサツチ・豊国主から続くアマカミ(天神)の道

原文の現在訳

　天より三つの　業お分け　君臣民の　三降りの　カミは百二十の　御子ありて　天成る道は　女もあらず　三代治まる

【疑問】

　ホツマツタヱの文章には、時として高度な難語が並びます。その難語の中の一つに「天(アメ)より」の言葉があります。2アヤ(綾)5(3 行)の文章の「天より三つの　業お分け」の「天(アメ)より」がその言葉に当てはまります。この「天(アメ)より」の言葉に対し先任のレポートを読んで見ますが、「天(アメ)より」の訳文はないようです。「天(アメ)より」の訳を抜かすことは、ホツマツタヱを全訳したことになるのでしょうか？　また、類似文章として、28アヤ24(4 行)にも「天(アメ)より三つの」の文章があるようです。

疑問の例題

ホツマのアヤ(彩)	ヲシテ　(現在訳)	疑問の文章
2アヤ5(3 行)	天より三つの　業お分け　君臣民の　三降りの	天(アメ)より
28アヤ24(4 行)	天より三つの　神宝　君臣分けて　賜われは	天(アメ)より

【疑問に応える】

(1)天(アメ)よりの意味についての考え方

ホツマツタヱを検索しますと、他にも「天(アメ)より」の文章が11ヶ所もあります。その11ヶ所を抜粋し、表「天(アメ)よりの訳文」にまとめました。また、それぞれの「天(アメ)より」に訳文(吉田説)を追加しました。その一端をご紹介しますと、19アヤ(彩)B2(1 行)の元の文章は、「二十五鈴　百三十枝の　年サナト　春の初日に　世の日嗣　皇子オシヒトに　譲りまし　天より伊勢に　降りいます」になります。この文章の意味は、「ワカヒト(アマテル神)の長男のオシヒトが、日高見の多賀にてアマカミ(天神)を天日嗣され、二十五鈴　百三十枝の　年サナト　春の初日に　世の日嗣(ヤマト国を治められる)ために、伊勢に降りられた」とのことです。そうしますと、この文章より「天(アメ)」は、日高見の多賀を指していることがわかってくるかと思います。そのため、表「天(アメ)よりの訳文」では「天の原」と記載しております。

このようにして、残る10ヶ所も含めて「天(アメ)より」の意味を考えて見ました。その結果ですが、表「天(アメ)よりの訳文」の右列に記載しましたが、天(アメ)の意味ですが、「御祖神、先神」が7ヶ所、「天の原」が2ヶ所および、「天空・天の神」が各1ヶ所になるようです。この訳の意味の傾向を見ますと、御祖神、先神、天空、天の原、天の神などと、「先か上か」などの意味ように、天(アメ)の意味は、「上位に位置する言葉」になるようです。

元々、アメ(天)の意味は、「雨のように上から下に降りる」の意味もあるところから、天(アメ)の訳は、「上位に位置する言葉」、「先か上か」などを意味していると思われます。そのため、11ヶ所の訳文は、御祖神、先神、天空、天の原、天の神などと訳文しました。

天よりの訳文

ホツマのアヤ(彩)	ヲシテ　(現在訳)	訳文　(吉田説)
2アヤ19(1 行)	時に天より　両神に　ツボは葦原　千五百秋	天⇒御祖神、先神
3アヤ11(1 行)	相交われは　天よりぞ　鳥に告げしむ　嫁ぎ法	天⇒御祖神、先神
16アヤ63(4 行)	時に天より　丹イトリの　一羽落つれは　天つ宣り	天⇒天空
16アヤ70(1 行)	宣ふは　天より授く　羽毛の帯　天に則りて	天⇒御祖神、先神
17アヤ56(1 行)	待ち許せども　科により　天より君に　告げあるぞ	天⇒御祖神、先神
17アヤ62(4 行)	情(ナサ)け枝　天より授く　魂と体(シヰ)	天⇒御祖神、先神
19アヤB2(1 行)	皇子オシヒトに　譲りまし　天より伊勢に　降りいます	天⇒天の原
20アヤ30(1 行)	天より降す　日読み神　両神これに　八将神なす	天⇒天の原
23アヤ14(1 行)	中柱立つ　国の道　天より恵む　トの神の　宗に応て	天⇒御祖神、先神
23アヤ27(4 行)	サお得て脱る　またの禍　遂に天より　罪せらる	天⇒天の神
39アヤ51(3 行)	君たる人徳の　ある故に　天より続く　神の皇子	天⇒御祖神、先神

(2)天(アメ)よりの意味

(1)項にて、天(アメ)よりの意味についての考え方を記述しました。このことより、(1)項の【疑問】で取り上げた2アヤ(綾)5(3 行)の文章の「天より三つの　業お分け」の意味は、先神などの意味を適用しますと、「天(アメ)より」の訳文は、トヨクンヌの先神などの意味ということになり、「国常立、クニサツチの教えにより」と訳できるようです。また、28アヤ(綾)24(4 行)の「天(アメ)より」の意味は、ニニキネの祖父である「アマテル神より」と訳ができるようです。次に、本文とその訳文を併記しましたので、比較し読んで頂きたいと幸甚です。

23アヤ(綾)5(3 行)

【本文】天より三つの　業お分け　君臣民の　三降りの

【訳文】天(国常立とクニサツチの教え)より　三つの　業お分け　君臣民の　三降りの

28アヤ(綾)24(4 行)

【本文】天より三つの　神宝　君臣分けて　賜われは

【訳文】天(アマテル神)より三つの　神宝　君臣分けて　賜われは

解説文　(赤文字は、原文の現在訳です。)

その八王子神が治めた「ト、ホ、カ、ミ、ヱ、ヒ、タ、メ」の八方の国々の世継ぎの神は、ヤミコ(八王子)神の各々の五人の皇子であるトヨクンヌになります。 このトヨクンヌシの頃になりますと、国も豊かになったことが称え名に現れているようです。そのことは、トヨクンヌ(シ)のトヨは豊、クンは国、ヌシは主の漢字が当てはまることからも、その意味が称え名として付けられたようです。

また、トヨクンヌの世になってくると人口も増え、また木の実、ゾ(稲)、ロ(穀物)の収穫が増えて社会が豊かなってきました。そのため、社会も多様性になり、そのままではアマカミ(天神)の世が保てなくなる兆候が見えて来ました。そこでトヨクンヌは、アマカミ(天神)の世を維持するため、天(国常立とクニサツチの教え)より、社会の構造変革をされました。その変革は、社会の構成する三つの業(身分、階級)にすることお企画されて、君の血筋に近い順に身分を分けられました。

その階級は、国を治める「君」、君を補佐する「臣」、社会を形成する「民」の三つにすることを降り(申し渡す)されました。その君であるカミ(神)には、百二十人の御子がありて、天なる道(国常立、クニサツチ、豊国主と続く、アマカミ(天神)へ道)は、妃となる特定の女もあらず(居なく)、国常立、クニサツチ、豊国主の三代の世が治まるアマカミ(天神)の世が続きました。

2アヤ(綾)6(4 行)～9(2 行)【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
		マサカキノ	ウヱツギヰモニ	マサカキの	植ゑ継ぎ五百に
		ミツルコロ	ヨツギノオカミ	満る頃	世継ぎの男カミ
		ウビチニノ	スビチオイルル	ウビチニの	スビチお入るる
		サイアイノ	ソノモトオリハ	幸いの	そのモトオリは
		コシクニノ	ヒナルノダケノ	越国の	ヒナルの岳の
		カンミヤニ	キノミオモチテ	神宮に	木の実お持ちて
		アレマセバ	ニワニウヱオク	生れませば	庭に植ゑおく
		ミトセノチ	ヤヨヒノミカニ	三年のち	弥生の三日
		ハナモミモ	モモナルユエニ	花も実も	百なる故に
		モモノハナ	フタカミノナモ	桃の花	二神の名も
		モモヒナギ	モモヒナミナリ	モモヒナギ	モモヒナミなり

語句の解説

・マサカキ→【疑問に応える】で解説、・五百→【疑問に応える】で解説あり、・入る→后に入れる、
・モトオリ→本縁→由来、縁起、・越国→敦賀～庄内地方、・植ゑおく→植ゑて置く、・モモ→百→桃

原文の現在訳

マサカキの　植ゑ継ぎ五百に　満る頃　世継ぎの男カミ　ウウビチニの　スビチお入るる　サ幸いの　そのモトオリは　越国の　ヒナルの岳の　神宮に　木の実お持ちて　生れませば　庭に植ゑおく　三年のち　弥生の三日　花も実も　百なる故に　モ桃の花　二神の名も　モモヒナギ　モモヒナミなり

【疑問__(1)】

2アヤ(綾)6(4 行)～7(1 行)」には、「マサカキの　植ゑ継ぎ五百(ヰモ)に　満る頃」の記述がありますが、何を意味しているでしょうか。

【疑問に応える__(1)】

「マサカキの　植ゑ継ぎ五百(ヰモ)に　満る頃」の文章ですが、初めての方には聞きなれない言葉と思います。そのため、次のように二つに分けて考えることにします。

(1) マサカキの

(2) 植ゑ継ぎ五百(ヰモ)に　満る頃

(1)マサカキの

ホツマツタヱを調べますと、マサカキの言葉が14ヶ所あります。そのマサカキの生態について、更に調べますと、下記の28アヤ(彩)56(3 行)～59(1 行)に記述されておりますが、「二枝三枝十枝」、

「スス苗」などの記述より見て、植物であることがわかると思います。また「君植ゆる」よりマサカキの育て方ですが、(1)種を蒔きその状態で芽が出て、その状態で大きく育てるのか、それとも(2)その後移植して育てるかとの二者選択の疑問が発生します。そこで、下記の8アヤ(彩)2(3 行)～3(1 行)を見ますと、「今年二十四の　拆鈴お　二十五の鈴に　植ゑ替えて」としており、その後、移植してスス苗を育てていることがわかってきます。

　また、移植して育てるとしたら種を蒔く時期は何時ごろうだろうかとの疑問が出てきます。下記の28アヤ(彩)6(2 行)～8(1 行)には、「千枝の年　種植ゑて　明くれは生ゆる　マサカキお」と記述しており、その後、種より芽が生えたマサカキは、「葉木国宮に　(国)常立の　植ゑて」と記述しており移植したことがわかります。それを機会に「国名も　(常世国より)　日高見」に変更され、日高見を治めていた歴代の「タカミムスビの(が)」が、アマカミ(天神)に代わって、下記のマサカキを「植ゑ継ぎの」と記述しております。

　そのマサカキの木の高さ(背丈)ですが、下記の7アヤ(彩)35(1 行)～59(3 行)の記述を見ますと、「上(カン)枝ニ玉　中つ枝に　真写の鏡　下和幣(ニギテ)　懸け」と記述しており、古代人が「上(カン)枝」に「ニ玉」を吊り下げることができる高さだったようです。古代人の身長よりマサカキの高さを推定しますと、約1．6m～約2m以下だったことが推定されます。このようなマサカキですが、「スス苗ありやかつて無し」と記述しており、現在では、ホツマ当時のマサカキは見ることができないのは残念です。

引用文

28アヤ(彩)56(3 行)～59(1 行)より引用すると、

諸神
門出して　国々巡り
マサカキノ　二枝三枝十枝
かつて無く　伊予に至れば
事代(主)が　館に入れて
主問ふ　スス苗ありや
かつて無し　手お空しくす
モノヌシが　翁植ゑんや
春日(神)また　我は臣なり
君植ゆる　天のマサカキ
如何せん

8アヤ(彩)2(3 行)～3(1 行) より引用すると、

今年二十四の
拆鈴お　二十五の鈴に
植ゑ替えて

28アヤ(彩)6(2 行)～8(1 行)より引用すると、

千枝に六万年お
天守の　一周りヅヅ
暦なる　枯、千枝の年
種植ゑて　明くれは生ゆる
マサカキお　葉木国宮に
(国)常立の　植ゑて国名も
日高見の　タカミムスビの
植ゑ継ぎの

7アヤ(彩)35(1 行)～59(3 行)より引用すると、

マサカキの　上(カン)枝はニ玉
中つ枝に　真写の鏡
下和幣(ニギテ)　懸け祈らんと

(2)植ゑ継ぎ五百(ヰモ)に　満る頃

前述の(1)マサカキの項よりマサカキの生態がわかってきました。そのことを重複して説明しますと、「千枝の年　種植ゑて　明くれは生ゆる」、その後「葉木国宮に　植ゑて」、更に歴代の「タカミムスビの(が)」が、アマカミ(天神)に代わり、マサカキを「植ゑ継ぎ」して行くことがわかってきました。

そのマサカキの「植ゑ継ぎ」の回数も、五百(ヰモ)回に達すると思われる記述、「五百(ヰモ)(回)に満る頃」の記述が2アヤ(綾)6(4 行)にありました。この「五百(ヰモ)(回)に満る頃」の記述ですが、額面通りに受け取りますと、太陽暦無換算で何年間になるかの疑問が発生します。そこで疑問に応えるため、式を構築しますと、式は、植ゑ継ぎ回数の五百(ヰモ)(回)と、植ゑ継ぎするのは千枝後ですので、千枝を掛け算します。その時の答えである穂の年数は、三千万穂(または、30，000，000穂)になります。そして、この三千万穂が良いのか悪いのか判断がつかないため、吉田説により太陽暦に換算し判断することにします。

太陽暦に換算するに当たって、すでに吉田説にて、スス暦の一日の数え穂を解読しておりました。そして、ウビチニ～ニニキネでの御世においては、一日の数え穂は、十六穂であることが判明しておりました。そこで、この三千万穂を太陽暦に換算しますと、式は、三千万穂÷十六穂÷三百六十五．二四二二となります。その時の太陽暦の年数は「五千百三十三．八六四年」に計算されます。

そこで、この約5133年間の終盤の年の出来事を見ますと、アマテル神の四代前のウビチニが、スビチを嫁した時期に当たります。そのことが、2アヤ(綾)6(4 行)～7(2 行)に記述されており、「マサカキの　植ゑ継ぎ五百(ヰモ)に　世継ぎの男カミ　ウビチニの　スビチお入るる」となっております。そうしま

すと、ウビチニ、スビチの御世の以前に、約5133年間の古代日本があったことになります。この約5133年間の古代は、本当に存在したのでしょうか。

2アヤ(綾)6(4 行)～7(2 行)より引用すると、
マサカキの　植ゑ継ぎ五百(ヰモ)に
満る頃　　世継ぎの男カミ
ウビチニの　スビチお入るる

【疑問__(2)】
　ホツマツタヱのスス暦には、本当に、約5133年間の古代が存在したのでしょうか。

【疑問に応えて__(2)】
　現在の知識では、一代当たり平均在位年数は約30年(注一)が常識です。この約30年を古代のアマカミ(天神)に適用しようかと思います。そこで、四代目のウビチニがアマカミ(天神)に就任する以前のアマカミ(天神)を調べますと、三代のアマカミ(天神)が存在します。一代目の国常立、二代目のクニサツチ、三代目が豊国主になります。この一代目から四代目のウビチニの在位年数を計算しますと、約30年×4代の約120年間になります。そこで、この約120年間と前述の約5133年間を対比しようとしますが、余りにも違い過ぎて比較にならないようです。このとから、「植ゑ継ぎ五百(ヰモ)に　満る頃」の「五百(ヰモ)」には、別の意味があるのではないかと思えて来ました。

(注1)　一代当たりの在位年数の約30年の根拠について
　京都に生身天満宮がありますが、創建は菅原道真が亡くなる二年前の西暦九百一年だそうです。そして現在の神主で、三十八代になるそうです。今年の2015年を基準に計算しますと、三十八代の一代当たりの在位年数は、式＝(2015年－901年)÷38代の約29．3年になります。

【疑問__(3)】
　約5133年間の根拠になった「植ゑ継ぎ五百(ヰモ)に」の「五百(ヰモ)」の言葉ですが、「植ゑ継ぎ五百(ヰモ)に」以外の使用例があるでしょうか。あれば、紹介して下さい。また、類似の事例もあれば教えて下さい。

【疑問に応えて__(3)】
　五百(ヰモ)の使用例について、抜粋して見ますと下記の通り八ヶ所の事例がありました。
2－6、植ゑ継ぎ五百(ヰモ)に、
2－15、五百(ヰモ)継ぎ天の、
4－4、五百(ヰモ)継ぎの、
7－49、五百(ヰモ)ニ御統(ミスマル)、

7－50、五百（ヰモ）矩、
18－15、植ゑ継ぎ五百（ヰモ）の、
18－16、五百（ヰモ）天の、
28－4、植え継ぎの　五百（ヰモ）に至れは、万年満ちて　五百（ヰモ）継ぎの、

　また五百（ヰモ）の類似として、三百（ミモ）また、千五百（チヰモ）の言葉もがありました。その中でも三百（ミモ）は、28－4三百（ミモ）ハカリ（億）の1件のみでした。

　だが、千五百（チヰモ）についても、八ヶ所の事例がありました。そして、この千五百（チヰモ）言葉の次に来る言葉は、秋、大人（ウシ）、生みて、子の、葦も、頭（コウヘ）、村ですが、その場で、即答できる数値でないようです。そこで、千五百（チヰモ）を数値と見れば、数えた数値、事前に把握した数値でなければ、使用は不可と思われますが、ホツマツタヱの文章は、いとも簡単に千五百（チヰモ）を使用しているように受け取りました。このことより、筆者の意見ですが、千五百（チヰモ）とは、数を数えることができない大きい数字の時に使用する言葉、または、抽象的な数を表す言葉と思えてきました。このことは、下記の八ヶ所の千五百（チヰモ）の使用例を見ることで納得できるようです。

千五百（チヰモ）の使用例
2－19、23－8、千五百（チヰモ）秋、
4－7、千五百（チヰモ）大人（ウシ）、
5－19、その千五百（チヰモ）生みて、
9－38、カンミムスビの千五百（チヰモ）子の、
23－10、千五百（チヰモ）の葦も、
23－22、千五百（チヰモ）の頭（コウヘ）、
23－22、受けて治むる千五百（チヰモ）村、
23－23、その安国の千五百（チヰモ）村、

　このことを裏付けるように、ホツマツタヱには、「大きい」の単語の使用例が少ない（1例）ようです。また、「沢山」の単語はありませんでした。そのため、通常は「大きい」や「沢山」の代わりに、千五百（チヰモ）が使用されていたのではないかと思われます。

大きいや沢山の言葉の使用例
オオキ（大き）
　2－16、オオキスクナキ（大き少なき）・・・・・1件
　　タクサン（沢山）・・・・0件
　また、ホツマツタヱに記述されているものとしては、「大いなり」、「大いなるかな」、「大いかな」の「オオイ」が3ヶ所ありました。

オオイ（大い）

4－36、ウハオオイナリ（ウは大いなり）、

5－30、オオイナルカナ（大いなるかな）、

21－67、コトオオイカナ（事大いかな）

このように千五百（チ丰モ）の言葉が、抽象的な数を表す言葉であるとする更なる根拠として、8アヤ（彩）31には、「丰」の文字が抜けた「千百（チモ）の物魔も」の記述があります。この言葉の本来の言葉は、千五百（チ丰モ）であると思えます。だが、ホツマツタヱの文章の五音、七道の文字数の制限により、「丰」が抜けたと思われます。このように、簡単に「丰」を抜くことができることは、数値でないことを意味しているようです。

このように考えますと、五百（丰モ）の言葉も、千五百（千丰モ）と同じように、抽象的な数を表す言葉と云えるようです。また、他に抽象的な言葉して、八、マス、三千、千、三十、ハカリ（億）などが、その類に入ると思えます。（このことは、現在の大辞林辞書からも、抽象的な数を表す言葉と云えます。）

抽象的な数を表す言葉の他の事例

2－18、八百連まで、

8－87、1 マスの物魔、

14－49、八百（ヤモ）万神も

16－89、八十万男子

17－2、八民、17－3、八十万人、17－46、三百の梁、五百は棟木ぞ、

17－3、4、八百万民は　百千声

23－1、三千物部ら

24－25、三千実の桃お、24－43、九千里の、24－43、三万民

26－32、千穂海に棲み

27－2、三千物部　八百万草も、27－87、わが八十万（歳）も　百歳

28－14、三十穂にしろし、28－21、ハタレ君　七ハカリ（億）九千お

抽象的な数を表す言葉、現在の事例（大辞泉より引用）

1.百歳－ひゃくねん。ひゃくさい。転じて、多くの年。長い年月。（デジタル大辞泉）

2.百歳・百年－ひやくさい・ひやくねん。また，多くの年月のたとえにもいう。（大辞林　第三版）

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

初代の国常立より引き継がれて来たマサカキの植ゑ継ぎの本数は、五百に満る頃（注二）になり、ちょうどその時は、世継ぎの男カミ（神）であるウビチニの結婚の頃であり、お妃としてスビチお妻に入れられるることになりました。そして二人が結婚された幸いの証となったその本縁（由来。縁起）は、越国（越前、現在の福井県）のヒナルの岳の神宮（注三）になり、　ウビチニは木の実お持ちになられて、妻

を初めて定められたアマキミ(天神)として、生れませ(お生まれになる)ば、木の実を庭に植ゑおくことをされました。そして、木の実を植えられてから三年(桃栗3年、柿8年)のちの弥生の三日頃に、ピンクの花(注四)を咲かせ、もののー ヶ月もしますと、小さな桃の実を付けます。このようにウビチニ、スビチの結婚の儀式がヒナルの岳の神宮のももに由来して、後の臣、民は、二人のことを、「百なる故に　桃の花　二神の名も　モモヒナギ　モモヒナミなり」と称えました。

（注2）五百に満る頃の訳文

植物であるマサカキの寿命はまちまち(拆鈴二十年　伸び如何、枯れに失せたり　これも天)であり、一鈴の六万穂を数えるためには、沢山のマサカキを植ゑ継ぎされたことが予想され、そのため、具体的な本数がわからず、古代の沢山の言葉である「五百」に満る頃と記述されたと解釈されます。

（注3）ヒナルの岳の神宮

ヒナルの岳：ホツマ研究家の高畠さんは、福井県越前市の日野山をヒナルの岳と指定しております。古名は、比那が嵩(奥の細道に詠まれた山)、御嶽山、日永嶽、雛が嶽と云われた記録が残されているようです。

神宮：日野山の登山道に鎮座する日野神社が有力な宮と思われます。住所：福井県越前市中平吹町茶端 80-1 になります。なお、祭神は、継体天皇、安閑天皇、宣化天皇になるようです。

（注4）弥生の三日、花も

2014年の旧暦3月3日は、4月2日でした。また、桃の開花時期は年によって違って来ますが、私の内の約30年の開花時期を眺めておりますと、三月の下旬～四月上旬頃になっているようです。

2アヤ(綾)9(3 行)～10(4 行)【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
		ヒナハマタ	ヒトナルマエヨ	雛はまた	人成る前よ
		キミハソノ	キノミニヨリテ	君はその	木の実によりて
		オカミハキ	メカミハミトゾ	男神は木	女神は実とぞ
		ナツキマス	ヒトナルノチニ	名付きます	人成る後に
		ヤヨヒミカ	ミキツクリソメ	弥生三日	御酒造り初め
		タテマツル	奉る		

原文の現在訳

雛はまた　人成る前よ　君はその　木の実によりて　男神は木　女神は実とぞ　名付きます　人成る後に　弥生三日　御酒造り初め　奉る

【疑問】

　モモヒナギ、モモヒナミの「ヒナ」には、何か特別な意味がありますか、また「雛（ヒナ）は、また人成る（ヒトナル）前よ」の「ヒナ」と「ヒトナル」との間には、どの様な関係になりますか。

【疑問に応えて】

（1）漢字の文字より考えた「ヒナ」の意味

　ヒナの言葉を漢字に置き換えますと「雛」になります。「雛」の意味を辞書で引きますと、①卵からかえったばかりの鳥。ひよこ。ひなどり。ひな人形。ひな。と記載されておりました。辞書の意味からは、直接には【疑問】に応えることができないように思えます。

（2）ホツマの難語より考えた「ヒナ」

　「ヒナ」の言葉は、前述のように現代語でも「ヒナ→雛」の言葉があるため、ホツマツタヱを改めて検索しようとは思っておりませんでした。だが、前述したように、漢字より見た「ヒナ」の意味は、モモヒナギ、モモヒナミの「ヒナ」に繋がっているかは、改めて疑問になって来ました。

　そこで、ホツマツタヱの記述を見ますと、2アヤ（綾）9（3 行）には、「ヒナはまた　人成る前よ」との記述があり、また4アヤ（綾）48（3 行～4 行）には、「天つ君　ヒ（一）より ト（十）までお　尽くす故　ヒト（人、仁）に乗ります」の記述がありました。更に、「ヒナ」と「人成る」との関係を品定めするため、「人成る」の文章を元に戻して考えて見ました。すると、「人成る」は、4アヤ（綾）48（3 行～4 行）では、「一十成る」→「ヒトナル」と説明しておりました。またその「ヒトナル」は、2アヤ（綾）9（3 行）では、「ヒナはまた　人成る前よ」と述べておりました。そうしますと、「ヒトナル」より「ト（十）」になってないため、「ト」を省きますと、「ヒナル（一成る）」となります。このことより、「ヒナル（一成る→初め）」が「ヒナ」の原形であったことが容易に推定されるようです。

　このように考えてきますと、モモヒナギ、モモヒナミの「ヒナ」の意味は、「ヒナル（一成る→初め）」になり、初め（一）より成ることになります。その「初め（一）より成る」を、ホツマの文章から判断される意味の何かと云えば、ウビチニ（モモヒナギ）が「妻を定められた」、ヒ（一、初め）に由来しているようです。そして、ウビチニ（モモヒナギ）はスビチニ（モモヒナミ）と結婚されることで、言葉も結び付き、「キ」と「ミ」により、キミ（君）の言葉が生まれたようです。

　このような意味があって、ウビチニ（モモヒナギ）とスビチニ（モモヒナミ）の二人は、夫婦になられた初めてのアマカミ（天神）として、モモ（桃を庭に植ゑる）、ヒナ（初めて妻を定める）、それにギ（木、男神）、ミ（実、女神）に由来し、モモヒナギ、モモヒナミと名付けられる元になったと推定されるようです。

　2アヤ（綾）9（3 行）より引用すると、

　　ヒナはまた　人成る前よ

4アヤ(綾)48(3 行～4 行)より引用すると、

天つ君　　ヒ(一)より ト(十)までお

尽くす故　ヒト(人、仁)に乗ります

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

ウビチニ、スビチニが結婚されて、モモヒナギ、モモヒナミのアマカミ(天神)に称えられました。そのモモヒナギ、モモヒナミの名のヒナの語源も「雛はまた　人成る前よ」を紐解きますと、初め(一)て妻を定められたことに由来する言葉に語源があったようです。また、結婚後の名であるモモヒナギ、モモヒナミのキ、ミは、二人の名を結び付けて君と呼ばれるようになりました。

そもそも、豊国主より天日嗣した男皇子のウビチニは、国と云うその木を大きく育て、その実によりて、国を繁栄さる役目を負っておりました。そのため、男神は国の御木と呼ばれ、女神は木の実を食材にされて御饗を賄いされたとぞとの謂れがあって、モモヒナギ、モモヒナミと名付きます。ウビチニ、スビチニの両神は、人成る(結婚した)後に、結婚のご報告をされるために、(注五、六)弥生の三日に御酒を造り初められて、天御祖神、天御中主、クニサツチ、豊国主の神に奉られることになりました。

(注五)ホツマ当時の雛祭りの日は、弥生三日と決まってなかった。

2アヤ(綾)に、雛祭りの起源と思える記述が豊富です。それも、弥生の三日に「花も実も」、「御酒造り初め」の言葉と、「二神の名も　モモヒナギ　モモヒナミなり　雛」の言葉より、当然、3月3日に雛祭りが行われたと思えて来ます。また、9アヤ(綾)にも、「スクナヒコナは　淡島の　カダガキ習ひ　雛祭り」と記述よりも3月3日の雛祭りを連想するようです。だが、ホツマツタヱを読んでも雛祭りが3月3日に行われた記述がありませんでした。(3月3日は、花見、酒造りの日?)

更に、ミカサフミのミ一100、溥泉伝本を読んで見ても、「三月の初め　桃・柳　御酒　雛祭り　ヱモギ(ヨモギ科)餅」、「弥生来て　桃咲き　女男(神)の雛祭り　草餅、酒に」の記述のように、「三月の初め」、「弥生来て」と記述しており、雛祭りが3月3日に行われていたとする記述がみつからないようです。このことから、古代の雛祭りは、三月の初めに行われていた行事であり、雛祭りの日が3月3日と定まってなかったようです。

2アヤ(綾)の記述

(1)弥生の三日　花も実も　百なる故に　桃の花このような

(2)二神の名も　モモヒナギ　モモヒナミなり　雛はまた　人成る前よ

(3)弥生三日　御酒造り初め　奉る

9アヤ(綾)の記述

(1)スクナヒコナは　淡島の　カダガキ習ひ　雛祭り

ミー133、ナメコトノアヤより引用すると、

三月の初め

桃・柳　　御酒　雛祭り

ヱモギ（ヨモギ科）餅

溥泉伝本、トシウチニ　ナスコトノアヤより引用すると、

弥生来て　　桃咲き　女男（神）の

雛祭り　　草餅、酒に

ヒクヱモセ　　弥（生）、ヱ、中、末

陽炎や

（注六）雛祭りを3月3日に定めた記述

それに対し、雛祭りを3月3日に定めたとする根拠は、以外にも江戸時代でした。ウィキーペティアの節句の項を拝見しますと、江戸時代に「幕府の公的な行事・祝日として、五節句を定めた」とする記載あり、この中に、雛祭りの日が、3月3日に定められたとの記述がありました。

2アヤ（綾）10（4 行）～12（4 行）【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
			モモトニクメル		桃下に酌める
		ミキニツキ	ウツリススムル	御酒に月	映りすすむる
		メカミマヅ	ノミテススムル	女神まづ	飲みてすすむる
		ノチオカミ	ノミテマシワル	のち男神	飲みて交わる
		トコノミキ	ミアツケレバヤ	床の御酒	身熱ければや
		アスミアサ	サムカワアビル	翌三朝	寒川浴びる
		ソデヒチテ	ウスノニココロ	袖ひちて	ウスの煮心
		マタキトテ	ナモウビチニト	またきとて	名もウビチニ
		スビチカミ	コレモウビニル	スビチ神	これも初生似る

語句の解説

・酌→酒を杯に注ぐこと、・ひち→不快感を伴うような場合に用いる。「ーめんどうだ」、

・ウス→ウビチニ、スビチのこと、・きと→とっさに。思わず。ふと。、・初生→はじめて生まれること

原文の現在訳

桃下に酌める　御酒に月　映りすすむる　女神まづ　飲みてすすむる　のち男神　飲みて交わる　床の御酒　身熱ければや　翌三朝　寒川浴びる　袖ひちて　ウスの煮心　またきとて　名もウビチニ　スビチ神　これも初生似る

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

アマカミ（天神）に供えられた弥生の三日の御酒は、桃（モ）の木の下（モト）で行われた、ウビチニ、スビチニ神のご結婚の祝いに持ち出されて、杯を傾けて御酒を酌められることになりました。その祝いの席は、満月の宵でした。杯に注いだ御酒に月が映り、厳かに中にも縁起の良い月が映った杯を、男神より女神にすすむる。

そして、女神がまづ御酒を飲みて祝杯を上げられ、次に、男神に御酒を飲むようにすすむることをされ、そして、のちに男神は、お祝いの御酒をお飲み干されてご夫婦が交わることで、桃（モ）の木の下（モト）での床の御酒になりました。

そして、新婚の二人の思いは朝方まで続き、身も心も高まり、思いが熱ければ熱いほどに　やがて翌（日）三の朝まで続いてしまいました。その二人は翌（日）三の朝日が登るや、寒川にて水浴びられるのでした。その寒川で浴びる時、スビチの袖がひち（わずらわしく）て・・・・。

このようにして、二人の寒川の朝は、昨夜の初夜の沸騰したウビチニとスビチの煮心が冷めきらないまま、また、きと（思わずにし）て、名もウビチニとスビチ神のアマカミ（天神）を日嗣されることになりました。

これも妻を定めた初生（はじめて生まれること）のアマカミ（天神）になられました。その後に続くアマカミ（天神）の結婚式は、ウビチニとスビチ神の結婚式が先例となり、二人の結婚式に似せられて行われることになりました。

2アヤ(綾)13(1 行)～15(2 行)【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
		フルコトヤ	オオキスクナキ	故事や	大き少なき
		ウスノナモ	コノヒナカタノ	ウスの名も	この雛形の
		オハカムリ	ウオソデハカマ	男はカムリ	大袖袴
		メハコソデ	ウハカツキナリ	女は小袖	上被衣なり
		コノトキニ	ミナツマイレテ	この時に	皆妻入れて
		ヤソツツキ	モロタミモミナ	八十続き	諸民も皆
		ツマサタム	アメナルミチノ	妻定む	天成る道の
		ソナワリテ	タグヒナルヨリ	備わりて	たぐひ成るより
		トシカゾエ	ヰモツキアマノ	年数え	五百継ぎ天の
		マサカキヤ		マサカキや	

語句の解説

・大き少なき→大なり小なり、・雛形→雛人形の原形で、ウビチニ、スビチを模った人形、
・カムリ=カンムリ→冠→辞書、・大袖→礼服の上衣。、・小袖→袖口が狭く，垂領で前を引き違えて着る衣服。、・被衣→女子が外で被る衣服、・つづき→続き、つらな→連、・天成る道→妻定たむこと、
・たぐひ→一緒に居るもの→(転じて)夫婦と訳する、・五百継ぎ→真賢木の抽象的な数を表す言葉

原文の現在訳

故事や　大き少なき　ウスの名も　この雛形の　男はカムリ　大袖袴　女は小袖　上被衣なり　この時に　皆妻入れて　八十続き　諸民も皆　妻定む　天成る道の　備わりて　たぐひ成るより　年数え　五百継ぎ天の　マサカキや

【疑問】

アメナルミチ(天成る道)とは、どのような意味になりますか。

【疑問に応えて】

アメナルミチは、ホツマの難語中の難語と云えます。その難語を更に複雑にしているのが、「アメ」をどのように捉えるかにより違ってくるとようです。「アメ」は、一般的には、「アメ(天)」などの訳ができるかと思います。その「アメ(天)」より派生する言葉は、アメナルミチが初見される以前の序～2アヤ(綾)6(2 行)までに八ヶ所が散見されるため、抜粋し「アメ(天)」の意味を考えて見ました。その訳は、宇宙・天空が4件、天神(後の天君、スメラギ)が3件、天の原が1件になるようです。

そこで、アメナルミチに返って意味を考えますと、アメナルミチ(天成る道)とは、2アヤ(綾)14(1 行～4 行)の記述を読みますと、「諸民も皆　妻定む　天成る道の　備わりて」となっております。その「諸

民も皆」のことを考えますと、「諸民」や「皆」は、全て天神の恵みを受けている民であると云うことに気付かれると思います。このように考えますと、アメナルミチ(天成る道)とは、「天神(後の天君、スメラギ)の世の成る道」と云う解釈で間違いないようです。現在に置き換えますと、「君が代」の世の成る道になるようです。

それに対し、「アメ(天)」の事例が多かった宇宙・天空として考えて見ますと、訳は「宇宙・天空の世の成る道」と解釈されるようです。そうしますと、地球上の人たちが知らない世界の成り立ちであることになり、この世界は空想の世界になり、現実的な「成る」の言葉からは遊離するようです。

序～2アヤ(綾)5(3 行)

(1)アメツチ(天地)・・・宇宙・天空
(2)アメニカエリノ(天朝に復りの)・・・天の原
(3)アメガシタシル(天が下知る)・・・天神(後の天君、スメラギ)
(4)アメハレテ(天晴れて)・・・宇宙・天空
(5)アメノメクリノ(天の巡りの)・・・宇宙・天空
(6)アメナナヨ(天七代)・・・天神(後の天君、スメラギ)
(7)オハアメトナリ(陽は天となり)・・・宇宙・天空
(8)アメヨリミツノ(天より三つの)・・・天神(後の天君、スメラギ)

解説文　(赤文字は、原文の現在訳です。)

このようにオシヒトのトツギ前に、五代前のウビチニとスビチの結婚式の様子が語られ、余りにも古ることが伝えられるや、あることは大き目に伝わり、あることは少なきに伝わっているようです。今、語られるウビチニとスビチの名も、いつしかこのようにウビチニ、スビチを模った雛人形の姿に定着して行ったと思われます。

その雛人形の男神の姿は、頭にカムリ(冠)を被り、上半身には大袖(礼服の上衣)を着て、下半身は袴を履いた姿になります。女神の姿は、被衣の下に小袖(袖口が狭く、垂領で前を引き違えて着る衣服)を着て、上は被衣(女子が外で被る衣服)を着ることになり、この時に皆の臣も妻を迎い入れて、八十(多く)の民がこれに続き、諸民も皆が妻を定められました。

このように妻を娶り、臣、民の生活が安定して来ると、アマカミ(天神)を補佐する体制も相整い、このことで天神(後の天君、スメラギ)の世の成る道の(も)備わりました。そして、この結婚により、類ひ(夫婦)成る時より暦の年を数え、マサカキの植ゑ継ぎも五百継ぎ(抽象的な数を表す言葉)になりました。このように、アマカミ(天神)の世の年を数えるため、このマサカキは、天のマサカキやと呼ばれておりました。

2アヤ(綾)15(2 行)～16(3 行)【本文】

ヲシテ	カナ文字		現在訳	
		ヰツヨノカミハ		五代の神は
	オオトノチ	オオトマエナリ	オオトノチ	オオトマエなり
	ツノクヰハ	オオトノニヰテ	ツノグヰは	大殿にゐて
	イククイオ	トマエニアヒテ	イククイお	戸前に会ひて
	ツマトナス	カレオハトノゾ	妻となす	故、男は殿ぞ
	メハマエ	ヤモツツキマテ	女は前と	八百続きまて

語句の解説

・オオトノチ→五代目の天神、・ツノグヰ→オオトノチのイミ名、・大殿→君、大臣の邸宅、
・戸前→邸宅の入口の戸、・殿→結婚した男の呼び名の総称、・前→結婚した女の呼び名の総称

原文の現在訳

五代の神は　オオトノチ　オオトマエなり　ツノグヰは　大殿にゐて　イククイお　戸前に会ひて　妻となす　故、男は殿ぞ　女は前と　八百続きまて

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

国常立から始まるアマカミ(天神)の神代は、初代・国常立、二代・クニサツチ、三代・豊国主、四代・ウビチニそして、五代のツノグヰに続きます。その五代の神の称え名は、オオトノチとオオトマエになります。 そのオオトノチのイミ名は、ツノグヰになります。

そして、ギ(君)のツノグヰは　いつもは大殿(君の邸宅)にゐ(居)てますが、イククイお見初められた時には、大殿の戸前にて二人が会ひてツノグヰを妻となされたようす。 故に、その後は、男は殿と呼ぶぞ　女は前と呼ぶようになり、その呼び名は八百(抽象的な数を表す言葉。この場合はこの世が長く)続きますまて、呼び名は変わらなかったようです。

2アヤ(綾)16(4 行)～19(1 行)【本文】

ヲシテ	カナ文字		現在訳	
	ムヨノツギ	オモタルノカミ	六代の継ぎ	オモタルの神
	カシコネト	ヤモオメクリテ	カシコネと	八方お巡りて
	タミオタス	ヲウミアツミノ	民お治す	淡海、アツミの
	ナカハシラ	ヒカシハヤマト	中柱	東はヤマト
	ヒタカミモ	ニシハツキスミ	日高見も	西は月隅
	アシハラモ	ミナミアワソサ	葦原も	南、阿波、ソサ
	キタハネノ	ヤマトホソホコ	北はネの	ヤマト細矛
	チタルクニ	オヨベトモヨホ	千足国	及べと百万穂
	ツギコナク	ミチオトロヒテ	継子なく	道衰ひて
	ワイタメナ		わいためな	

語句の解説

・カシコネ→オモタルの妃・才女、・八方→四方と四隅。八つの方角、・淡海→近江、アツミ→安曇、
・中柱→室やの中央にある柱、・日高見→仙台地区、月隅→筑紫、・葦原→日本国の異称、
・ソサ→紀、・細矛千足国→鳥取、島根地方、・百万穂→スス暦の暦数字、
・衰える→力や勢いが弱くなる。、・わいため→けじめ。区別。差別。

原文の現在訳

六代の継ぎ　オモタルの神　カシコネと　八方お巡りて　民お治す　淡海・アツミの　中柱　東はヤマト　日高見も　西は月隅　葦原も　南・阿波・ソサ　北はネの　ヤマト細矛　千足国　及べと百万穂　継子なく　道衰ひて　わいためな

【疑問】

六代のオモタルの神とカシコネ(妃)には、「継子(が)なく　(天成る)道(も)衰ひて」と記述されており、その原因は、「無罪人斬れは　子種絶つ　げに慎めよ(23アヤ(綾)7)」と記述されているようです。では、誰を斬ったかと思えば、「民利きすぐれ　物奪う　これに斧もて　斬り治む(23アヤ(綾)4、5)」と記述していることからもわかるように、「民」を斬っておりました。だが、継子(世継ぎ)の一点に絞って考えますと、「民」は、オモタルの継子を生んでくれません。そのため、「民を斬ったこと」と、「継子(が)ないこと」は、直接関係がないと思われます。そうしますと、「継子(が)なく　(天成る)道(も)衰えた」原因は、他にあったことが推定されます。

23アヤ(綾)4(4 行)～8(1 行)より引用すると、

オモタルの　　民利きすぐれ
物奪う　　これに斧もて

斬り治む　　斧は木お切る
器ゆえ　　金練人に矛お
作らせて　　利き者斬れば
世継ぎなし　　民の齢も
八万歳なれ　　食にもよれども
昔あり　　万鈴も減り
百歳より　　また万に増す
これ鈴お　　結ぶ神なり
恐るるは　　無罪人斬れは
子種絶つ　　げに慎めよ
天の神　　嗣きなく政り
尽きんとす

【疑問に応える】

「継子(が)なく　(天成る)道(も)衰えた」原因をもう少し考えて見ようと思います。その直接の原因は、后の称え名のカシコネに、ヒントが隠されているのではないかと考えられます。カシコネの称え名は、「カシコ」と「ネ」の合成語からなっているようです。そのカシコの言葉は、ホツマツタヱの10アヤ(綾)32に「カシコ(畏)みて」、16アヤ(綾)95に「いともカシコ(畏)し」などに見られるように、古代からの継続の言葉になるようです。また、現在の大辞林辞書を見ますと、「おそれ多いこと」、「頭がよく知能がすぐれていること」などの意味が記載していました。また、「ネ」の意味を考えて見ますと、「北」「根」「寝」などが上げられました。

そこで、カシコネの称え名のように、称え名の作られ方、または意味について、過去の調査結果から振り返って見ようと思います。まず、最初の神の国常立の名ですが、日本国を造ったことから称え名が付与されておりました。次のクニサツチは、南西の地方に八つ国を建てたことより称え名が付与されておりました。三代目の豊国主は、稲作を奨励し国を豊かにしたことより付けられた称え名でした。このように、称え名は、その人の業績が元で、称え名が付けられていることがわかってきます。

そこで、后のカシコネの称え名を考えて見ますと、カシコの意味より、大変に秀才な女の人だったと思われます。その才女はオモダルを助けて、日高見(仙台地方)～月隅(筑紫・九州)などの八方を巡られて、民を治められました。だが、国が豊かになって来る反面、豊かさを教授できない、所謂、貧しい人たちも生まれ、貧富の差が激しくなったことが考えられます。そのため、貧しくて少し利口な者は、悪いこととは知りつつ、生きて行く糧を、他人の物を奪うことで達成させていたようです。そのため、オモタル、カシコネは、治安を維持するため、悪者を取り締まられたようです。その取締の方法は、「民利きすぐれ　物奪う　これに斧もて　斬り治む(23アヤ(綾)4、5)」との記述のように、ドロボーを斧で斬り付けると云うような乱暴な取締でした。このことは、近代流で言えば恐怖政治を行われたようです。

このような恐怖政治の過程において、后のカシコネ（妃）が、若くして亡くなる事態が発生したことが推定されます。このため、二人の間には、子供を残すチャンスが無くなったことが考えられます。更に深読みしますと、「利き者斬れば　世継ぎなし（23アヤ（綾）5、6）」との記述より推定しますと、オモタルは何らかの原因で、后である「利き者の（カシコネ）を斬り　それが元で世継ぎが作れなかった」ことも考えられます。このように考えてきますと、「継子（が）なく　（天成る）道（も）衰ひて」の本来の意味は、「カシコネ」の行く末に、何らかに要因があったと考える方が一般的かと思われます。それにしても、オモタルの治世は、世間の評判のように恐怖政治が行われ、「無罪人斬れは　子種絶つ　げ（本当）に慎めよ（23アヤ（綾）7）」の記述に象徴されたようです。

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

五代目のオオトノチ、オオトマエの後を日継ぎされたアマカミ（天神）は、六代目の日継ぎをされたオモタルの神、　カシコネ（お妃）との二人になります。そして、15アヤ（綾）42を引用しますと、「国常立の八方お巡りて」と記述しており、その二人は、国常立が開かれた八方おひと巡りされて　民お治すと云われました。出発は、淡海国（滋賀県）、現在の高島市のアツミ（安曇）宮の中柱の八尋になりました。そして、ひと巡りされた国々は、当時、東には都があったヤマト日高見（仙台地方）も巡られ、西は月隅（筑紫）、　葦原（中つ国）も巡られました。南の方向は、今の四国の阿波、ソサ（紀州）に行かれ、北はネの方向のヤマト細矛（島根県）千足国（鳥取県）にも足を伸ばされ、民を治めていかれました。

また、この頃になると、23アヤ（綾）3（1　行）～4（3　行）より引用しますと、国常立の「神の世も　マス万歳の寿も」と超高齢の世であったようですが、ゾロ（稲）　を食べる回数が徐々に増えて、月に三食のウビチニの世には、寿も百万歳に減少していたようです。そのような国常立の神の世には、及べとも、オモタルの世の寿も百万穂になっていたようです。更に、15アヤ（綾）24（4 行）～25（1 行）を引用しますと、「オモタルの　末に粗（ホボ）稲（ゾ）と　なる故に」と、ゾ（稲）も引き続き食べられていたことが記述されておりました。そのゾロ（稲）の回数も月に三食と増え、国も豊かになって来る反面、豊かさを教授できない貧しい人たちも生まれ、貧富の差が激しくなって来ました。そのため、貧しくて少し利口な者は、悪いこととは知りつつ、生きて行く糧として、他人の物を奪うようになって来たようです。

そのため、オモタル、カシコネは、治安を維持するため、悪者を取り締まられ、斧をもて民を斬り、治められました。また金練人に矛を作らせて、利き者も斬れたようです。この利き者の中に、才女であったカシコネ（妃）が、含まれていたようです。このため、世継ぎである継子の誕生もなくなったようです。この世の恐ろしいことは、無罪人のようなカシコネ（妃）を斬れば、後の子種を絶つことになります。このことは、げ（本当）に慎まなければならないことです。これで、オモタルのアマカミ（天神）の嗣ぎ子もなくなり、ウビチニより引き継いだ政も、オモタルの代で尽きることになりました。偏に、国常立より続いた天成る道も衰ひて、天地、臣民に示す権威のわいためな（けじめ）も無くなって来たようです。

引用文

15アヤ(綾)42より引用すると、

国常立の　　八方お巡りて

23アヤ(綾)3(1 行)～4(3 行)より引用すると、

神の世も　　マス万歳の

寿も　　ウビチニの世は

厳かに　　飾る心の

寿も　　百万歳ぞ

15アヤ(綾)24(4 行)～25(1 行)より引用すると、

オモタルの　　末に粗(ホボ)稲(ゾ)と

なる故に

2アヤ(綾)19(1 行)～21(3 行)【本文】

ヲシテ	カナ文字	現在訳	
	トキニアメヨリ		時に天より
	フタカミニ　ツボハアシハラ	両神に	ツボは葦原
	チ中モアキ　イマシモチヒテ	千百五百秋	いまし用いて
	シラセトテ　トトホコタマフ	治らせとて	瓊と矛給ふ
	フタガミハ　ウキハシノヱニ	両神は	浮橋のヱに
	サグリウル　ホコノシツクノ	探り得る	矛の滴の
	オノコロニ　ミヤトノツクリ	オノコロに	宮殿造り
	オオヤマト　ヨロモノウミテ	大ヤマト	万物生みて
	ヒトクサノ　ミケモコカヒモ	人草の	御食もコカヒ
	ミチナシテ　ワイタメサタム	道なして	わいため定む
	イサオシヤ	功しや	

語句の解説

・葦原→日本国の異称、・いまし(汝)→そなた・なんじ、・いまし→今し・今となって、

・ヱ→え〔へ〕→上、・滴→液体の粒が滴り落ちる、・宮殿→君、皇子の居住・御殿、

・ヨロモノ→万物→宇宙に存在するあらゆるもの、・人草→一般人々・人民・民草、

・コカヒ→飼蚕→カヒコ(蚕飼)、・わいため→けじめ。区別。差別。・功し→手柄、功績

原文の現在訳

時に天より　両神に　ツボは葦原　千百五百秋　いまし用いて　治らせとて　瓊と矛給ふ　両神は　浮橋のヱに　探り得る　矛の滴の　オノコロに　宮殿造り　大ヤマト　万物生みて　人草の　御食もコカヒ道なして　わいため定む　功しや

【疑問】 オノコロ、ヲノコロの言葉をお聞きしますが、どのような意味があるか教えて下さい。

【疑問に応えて_(1)】

オノコロ、ヲノコロの言葉の意味について、(1)辞書、(2)古事記、(3)日本書紀、(4)ホツマツタヱの四書について、比較しながら考えることにしました。すると、(1)辞書、(3)日本書紀では、磤馭慮嶋(オノコロジマ)のみ、(2)古事記では、淤能碁呂嶋(オノコロジマ)のみを記載しておりました。

(1)辞書

オノコロ、ヲノコロについて、デジタル大辞林・辞書の解説を調べて見ました。すると、次のように、「おのころ-じま【磤馭慮島】・・・《「自凝(おのころ)島」の意で、自然に陸地が凝り集まってできた島の意》日本神話で、伊弉諾尊(いざなぎのみこと)と伊弉冉尊(いざなみのみこと)の二神が、はじめて作ったという島。転じて、日本の称。」と記載しておりました。

(2)古事記

古事記の「淤能碁呂(オノコロ)」、「淤能碁呂嶋(オノコロジマ)」の記述を、HPアドレス「http://www.seisaku.bz/kojiki_index.html」 より抜粋して見ました。すると、古事記には、「淤能碁呂」の記述は、「0 個所」でした。記述されているのは、「淤能碁呂嶋」のみの1個所の記述でした。

古事記　上巻-2／神代七代～伊邪那岐命と伊邪那美命

於是天神、諸命以、詔伊邪那岐命・伊邪那美命二柱神「修理固成是多陀用幣流之國。」賜天沼矛而言依賜也。故、二柱神、立訓立云多多志天浮橋而指下其沼矛以畫者、鹽許々袁々呂々邇此七字以音畫鳴訓鳴云那志而引上時、自其矛末垂落之鹽累積、成嶋、是淤能碁呂嶋。自淤以下四字以音。

(3)日本書紀

また、日本書紀の「磤馭慮(オノコロ)」、「磤馭慮嶋(オノコロジマ)」の記述を、日本書紀(朝日新聞社本)のHPアドレス「http://www.j-texts.com/sheet/shoki.html」より抜粋して見ました。すると、日本書紀には、「磤馭慮」の記述は、「0　個所」でした。記述されているのは、すべて「磤馭慮嶋」のみのであり、6個所の記述がありました。

日本書紀巻第一　神代上　　下の(NO,)は、説明のために記した。(吉田記)

《第四段本文》伊弉諾尊。伊弉冊尊。立於天浮橋之上、共計曰。底下豈無国歟。廼以天之瓊〈瓊。玉也。此曰努。〉矛、指下而探之。是獲滄溟。其矛鋒滴瀝之潮。凝成一嶋。名之曰(1)磤馭慮嶋。二神於是

降居彼嶋。因欲共為夫婦、産生洲国。便以(2)磤馭慮嶋為国中之柱。〈柱。此云美簸旨邏。〉而陽神左旋。陰神右旋。分巡国柱、・・・(後略)・・・・・。
《第四段一書第一》一書曰。天神謂伊弉諾尊。伊弉冊尊曰。有豊葦原千五百秋瑞穂之地。宜汝往脩之。廼賜天瓊戈。於是二神立於天上浮橋投戈求地。因画滄海而引挙之。即戈鋒垂落之潮結而為嶋。名曰(3)磤馭慮嶋。二神降居彼嶋。化作八尋之殿。又化竪天柱。陽神問陰神曰。汝身有何成耶。対曰。吾身具成而、有称陰元者一処。陽神曰。・・・(後略)・・・・・。
《第四段一書第二》一書曰。伊弉諾尊。伊弉冊尊二神、立于天霧之中曰。吾欲得国。乃以天瓊矛、指垂而探之得(3)磤馭慮嶋。則抜矛而喜之曰。善乎、国之在矣。
《第四段一書第三》一書曰。伊弉諾・伊弉冊二神、坐于高天原曰。当有国耶。乃以天瓊矛、画成(4)磤馭慮嶋。
《第四段一書第四》一書曰。伊弉諾・伊弉冊二神、相謂曰。有物若浮膏。其中蓋有国乎。乃以天瓊矛探成一嶋。名曰(5)磤馭慮嶋。・・・(後略)・・・・・。
《第四段一書第八》一書曰。以(6)磤馭慮嶋為胞。生淡路洲。次大日本豊秋津洲。次伊予二名洲。次筑紫洲。次吉備子洲。次双生億岐洲与佐度洲。次越洲。

(4)ホツマツタヱ

ホツマツタヱ(本)よりオノコロ、ヲノコロを抜粋しますと、古事記の1個所また、日本書紀の6個所に対し、16個所(11文章)の3倍弱もありました。その大凡の意味を文章毎に層別しますと、「島の起源?(5文章)」、「生命の核? (3文章)」、「人の思い? (3文章)」の3種類に仕訳されるようです。だが、ホツマツタヱには、日本書紀のように「嶋」に偏ってなく、広い意味でオノコロ、ヲノコロが使用されていることがわかってきます。

(注七) 【オノコロ、ヲノコロの抜粋】 下表の(NO,)の語句の意味。
(1) 瓊(と・に)と矛(ほこ)給ふ
・瓊(たま、赤色の玉)と矛(武器の一種)を給う。
(2)胞衣(えな)
・胎児を包んでいた膜や胎盤など。
(3) 河車(かわくるま)
・胞衣、胎衣、紫河車とも云う。
(4)臍の緒(ほそのお)
・《古くは「ほそのおお」》、へその緒。臍帯(さいたい)。

オノコロ、ヲノコロの文章の抜粋

全16個所(11文章)の「オノコロ」の言葉を、各文章の前後の言葉より意味を考えて見ました。その結果、3種類に勝手に仕分けて見ました。だが、本来は、すべてのオノコロの文章に共通する言葉が、ホツマツタヱに記述されていると思えます。また、すでに前述しているように、国常立、クニサツチ、豊

国主の名にも意味が隠されていて、ホツマツタヱより解説が出来ておりました。このように考えてきますと、オノコロの言葉にも、恐らく、本来の意味が隠れているのではないかと思われます。

【オノコロ、ヲノコロの抜粋】　　全16個所(11文章)を表記しました。

アヤ(綾)	オノコロの文章	使用法
2アヤ19～21	両神に　ツボは葦原　千百五百秋　いまし用いて　治らせとて　(1)瓊と矛給ふ　両神は　浮橋の上に　探り得る　矛の滴の　オノコロに宮殿造り　大ヤマト　万物生みて　人草の　御食もコカヒ　道なしてわいため定む　功しや	島の起源?
3アヤ5～6	三年慈に　足らざれど　岩楠船に　乗せ捨つる　翁拾たと　西殿に養育せは後に　二柱　浮橋に得る　オノコロの　八尋の殿に　立つ柱	島の起源?
4アヤ28	トヨケの神の　教ゑあり　障るイソラの　禊にて　(2)胞衣の囲みはオノコロの　玉子とならは　幸よろし　玉の岩戸お　開けとて	生命の核?
14アヤ21	やや嬰児の　形(なり)備ふ　ちなみ(父の精液)の赤(母の血)はオノコロの　胞衣の形は　(3)河車　(4)臍の緒となる	生命の核?
16アヤ22	オノコロの　胞衣の臍の緒　河車　ややシシ(肉)お盛り　巡り減る	生命の核?
18アヤ1～6	天晴れて　長閑に御幸　遊びます　高天は万の　国形　これオノコロと　にこ笑みて　中の岩穂に　御座します　側に臣有り　天皇孫　御前に参て　慎みて　そのオノコロの　故お請ふ　君(アマテル神)の教ゑは　両神の　浮橋に立ち　この下に　国なからんと　瓊矛もて　探る御矛の　滴りが　凝りなる島お　オノコロと　降りて共に　ト継ぎして御柱廻り　天地歌お　詠みてオノコロ　万物お　生みしは昔　天地のアホウビ(泥々)未だ　天御祖	島の起源? 島の起源? 島の起源? 島の起源?
18アヤ11～12	人に生まれて　蠢(ウグメ)くに　床世の道お　教ゆ神　国常立も　乗り巡り　国地(ワニ)八方お　何に県と　生む国すへて　オノコロぞ	島の起源?
18アヤ18～20	かくぞ御心　尽くしもて　民も居安く　なす国お　オノコロ島と　名付くなり	島の起源?
18アヤ22～23	人成る道は　瓊お用ひ　その元は口手　ヲノコロの　四つは地に合ひ国を治む　業とこの真手　オノコロの　もしも動かば　世直しお　オノコオノコと　祈るべし	人の思い? 人の思い?
18アヤ25	日直りと　祈り止むる　オノコロと　童の額　かに押せは　おそわ(魘)れぬ法　オノコロあやぞ	人の思い? 人の思い?
23アヤ9～10	両神は　これお用ひて　葦原に　オノコロお得て　ここに居り	人の思い?

【疑問に応えて_(2)】

発見された「オ*ノ*コ*ロ」

ホツマツタヱの多くの研究者は、私を含めて、最初は、ヲシテ文より意味を読み取ろうと施行します。例えば、18アヤ(綾)3～4を引用しますと、「探る御矛の　滴りが　凝りなる島お　オノコロ」より、オノコロの意味を凝りなる島の言葉より、「ドロドロとした液状の島が固まった島」と解説しがちです。無理な場合は、ヲシテ文の行間に自分の知識を重ねて、アバウトな意味を創作してしまいます。

その典型的なのが、私が上で説明した「島の起源?(5文章)」、「生命の核? (3文章)」、「人の思い?(3文章)」の創作言葉になるかと思います。だが、冷静になって考えて見ますと、ホツマツタヱの読者が納得してくれる意味になっているでしょうか。甚だ疑問に思えて来ました。

そこで、オノコロ、ヲノコロの言葉を改めて、ホツマツタヱより捜すことにしました。先に説明したように、クニトコタチ(国常立)、トヨクンヌ(豊国主)、クニサツチの名は、業績より名付けられた称え名と思われました。そうすると、オノコロ、ヲノコロは、業績か、名誉か、人徳か、家系かなどと考えられます。

そこで、長年の品質管理、統計処理時の手法により、ホツマツタヱ全文を検索することにしました。その検索する言葉としては、ホツマツタヱの(1)原文をそのまま使用方法です。検索言葉は、オノコロまたは、ヲノコロのずばり原文です。次は、オノコロ、ヲノコロの言葉が(2)短縮形となっていることが想像される時です。そのため、すべての文字にフィットするワイルド文字の「*」印を使用する方法です。

検索言葉は、オ*ノ*コ*ロまたは、ヲ*ノ*コ*ロになります。その検索結果のフィット個数は、下表の通り (1)オノコロ-15個、(2)ヲノコロ-1個、(3)オ*ノ*コ*ロ-2個、(4)ヲ*ノ*コ*ロ-0個になりました。

検索言葉の検索結果のフィット個数

NO,	言葉	個数	備考
(1)	オノコロ	15	
(2)	ヲノコロ	1	
(3)	オ*ノ*コ*ロ	2	(1)項と重複する15個は除く
(4)	ヲ*ノ*コ*ロ	0	(2)項と重複する1個は除く

今回の検索結果より特出することは、上表の(3)オ*ノ*コ*ロの言葉が、ホツマツタヱ全文の中で、2個所の文章が存在することが発見されたことです。今まで、オノコロは、「ドロドロとした液状の島が固まった島」などと解説していたのが、新たな解釈が始まったことを意味します。古事記、日本書紀の二書が、淤能碁呂嶋、磯馭慮嶋を日本の呼称と訳していた、その原本が発見されたことを意味します。

発見された(3)オ*ノ*コ*ロの言葉

1件目

27アヤ(綾)36にて、発見されたオノコロの原文と思われる言葉は、オ*ノ*コ*ロ⇒ミオヤノココロになります。現在文で表記しますと、ミオヤノココロ　(御祖の心、御親の心)の意味になるようです。御祖の心と訳しますと、天御祖神になります。この天御祖神は、天御中主が亡くなり 天に上がって祀られた神になります。また、初代のアマカミ(天神)の国常立が、高天に祀った神にあたります。なお、オノコロをミオヤノココロ(天御祖神の心、御親神の心)と訳した解説文は、2アヤ(綾)19(1 行)～21(3行)【本文】の解説文に挿入しました。ご査収をお願いします。

27アヤ(綾)36

ヒトクサノ	ミオヤノココロ	←オノコロの発見　日時 2015 年 4 月 1 日 8 時 45 分
スヘイレテ	モモノヲシテノ	発見した時の検索用語　「オ*ノ*コ*ロ」
ナカニアリ	アヤシゲケレバ	↓　↓　↓
アヂミエズ	ニシキノアヤオ	ミオヤノココロ
		↓　↓　↓
		御祖の心　⇔　天御祖神の心

2件目

17アヤ(綾)40にて、発見されたオノコロの原文と思われる言葉は、オ*ノ*コ*ロ⇒オヤノココロモになります。現在文で表記しますと、オヤノココロモ　(祖の心も、親の心も、天祖神の心も)の意味になるようです。

17アヤ(綾)40

ワダカマリ	チヨオフルトモ	
マシナラズ	オヤノココロモ	←オノコロの発見　日時 2015 年 4 月 1 日 8 時 46 分
トシハゲシ	アエシノバズテ	発見した時の検索用語　「オ*ノ*コ*ロ」
ニハカカゼ	オロカニクラク	↓　↓　↓
		オヤノココロモ
		↓　↓　↓
		祖の心も　⇔　天祖神の心も

（ご参考）

オノコロ（天御祖神の御心）に置き換えた文章

下表の11文章に、オノコロ⇒オノコロ（天御祖神の御心）に置き換えた時の文章は、今までのオノコロ島との概念が消えて、古代日本列島を国常立が創建された時の建国の精神である天御祖神の御心が伝わってくるようです。これが、本来のオノコロの意味と思われます。

【オノコロ、ヲノコロの抜粋】　　全16個所（11文章）を表記しました。

アヤ（綾）	オノコロの文章
2アヤ19～21 （下記に解説文）	両神に　ツボは葦原　千百五百秋　いまし用いて　治らせとて　（1）瓊と矛給ふ　両神は　浮橋の上に　探り得る　矛の滴の　オノコロ（天御祖神の御心）に　宮殿造り　大ヤマト　万物生みて　人草の　御食もコカヒ　道なして　わいため定む功しや
3アヤ5～6	三年慈に　足らざれど　岩楠船に　乗せ捨つる　翁拾たと　西殿に　養育せは後に　二柱　浮橋に得る　オノコロ（天御祖神の御心）の　八尋の殿に　立つ柱
4アヤ28	トヨケの神の　教ゑあり　障るイソラの　禊にて　（2）胞衣の囲みは　オノコロ（天御祖神の御心）の　玉子とならは　幸よろし　玉の岩戸お　開けとて
14アヤ21	やや嬰児の　形（なり）備ふ　ちなみ（父の精液）の赤（母の血）は　オノコロ（天御祖神の御心）の　胞衣の形は　（3）河車　（4）臍の緒となる
16アヤ22	オノコロ（天御祖神の御心）の　胞衣の臍の緒　河車　ややシシ（肉）お盛り　巡り減る
18アヤ1～6	天晴れて　長閑に御幸　遊びます　高天は万の　国形　これオノコロ（天御祖神の御心）と　にこ笑みて　中の岩穂に　御座します　側に臣有り　天皇孫　御前に参て　慎みて　そのオノコロ（天御祖神の御心）の　故お請ふ　君（アマテル神）の教ゑは　両神の　浮橋に立ち　この下に　国なからんと　瓊矛もて　探る御矛の　滴りが　凝りなる島お　オノコロ（天御祖神の御心）と　降りて共に　ト継ぎして　御柱廻り　天地歌お　詠みてオノコロ（天御祖神の御心）　万物お　生みしは昔　天地の　アホウビ（泥々）未だ　天御祖
18アヤ11～12	人に生まれて　蠢（ウグメ）くに　床世の道お　教ゆ神　国常立も　乗り巡り　国地（ワニ）八方お　何に県と　生む国すへて　オノコロ（天御祖神の御心）ぞ
18アヤ18～20	かくぞ御心　尽くしもて　民も居安く　なす国お　オノコロ（天御祖神の御心）島と名付くなり
18アヤ22～23	人成る道は　瓊お用ひ　その元は口手　オノコロ（天御祖神の御心）の　四つは地に合ひ　国を治む　業とこの真手　オノコロ（天御祖神の御心）の　もしも動かば　世直しお　オノコオノコと　祈るべし
18アヤ25	日直りと　祈り止むる　オノコロ（天御祖神の御心）と　童の額　かに押せは　おそわ（魘）れぬ法　オノコロ（天御祖神の御心）あやぞ
23アヤ9～10	両神は　これお用ひて　葦原に　オノコロ（天御祖神の御心）お得て　ここに居り

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

時に、天の原の重鎮の神々より、イサナギ、イザナミの両神に、七代目を天日嗣するように勅がありました。その両神が治めた政治の中心地であるツボは、23アヤ（綾）8～10より引用すると、「豊葦原の瑞穂国になります。季節は千百五百の秋になります。天の原の重鎮の神々より、いまし（汝）は、逆矛を用いて大ヤマトを治らせとて、瓊（ヲシテ）と逆矛を賜ふわれました。

そして、イサナギ、イザナミの両神は、浮橋（仲人）のできる天の原の使者のヱ（得）に、八方を巡らせ、人民の心を探り、人心を得るように心がけられた政治をされました。一方、オモタル、カシコネの世のように、民が利きすぐれて物を奪う者が横行すると、23アヤ（綾）8～10のように、「イザナギに　宣ふは　・・・・矛は逆矛　両神は　これお用いて」と記述されているように、悪人に対し矛を用いて征伐されました。その征伐も時に、矛の滴の落ちることもありました。

このことがあってからは、逆矛を使用しなくて良いように、また、大ヤマトの神であり、高天に祀れたオノコロ（天御祖神の御心）に背くことがないように、また、天成る道が永久に続くように祈られました。」この甲斐があって、その後は、人身も一新し、イサナギ、イザナミの両神は、豊葦原の瑞穂国に宮殿造りされて、日高見～月隅に至る大ヤマトをすこやかに治められ、万物の生育も生みて、人草（人々、民草）の御食も豊かに回数も増え、衣食住の衣の殖産興業の元になる蚕を飼う余裕もできて来ました。

このように、瓊（ヲシテ）の道を良くなして、　わいため（けじめ、法律）も定む社会が確立して来ました。この御世は「ヤマトの国造りの始め」と、後の世に語り種になったイサナギ、イザナミの御世であり、このことは、両神の功し（てがら）からも伺うことができるようですや。

23アヤ（綾）8～10より引用すると、

故、イザナギに
宣ふは　豊葦原の
千五百秋　瑞穂の田あり
汝行き　治らすべしとて
瓊と矛と　授け賜わる
瓊はヲシテ　矛は逆矛
両神は　これお用いて
葦原に　オノコロオヱて
ここにおり

2アヤ(綾)21(3 行)～25(2 行)【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
			アメノカミヨノ		天の神代の
		ナナヨメオ	ツグイトクチハ	七代目お	継ぐ糸口は
		トコヨカミ	キノミヒガシニ	常世神	木の実東に
		ウヱテウム	ハゴクニノカミ	植えて生む	ハゴクニの神
		ヒタカミノ	タカマニマツル	日高見の	高天に祀る
		ミナカヌシ	タチハナウヱテ	御中主	橘植ゑて
		ウムミコノ	タカミムスビオ	生む御子の	タカミムスビお
		モロタタユ	キノトコタチヤ	諸讃ゆ	キ(東)の常立や
		ソノミコハ	アメカカミカミ	その皇子は	天鏡神
		ツクシタス	ウビチニモウク	筑紫治す	ウビチニ儲く
		コノミコハ	アメヨロツカミ	この皇子は	天萬神
		ソアサタシ	アワサクウメバ	ソアサ治し	アワ、サク生めば
		アワナギハ	ネノシラヤマト	アワナギは	ネのシラヤマト
		チタルマデ	ノリモトホレバ	チタルまで	法も通れば
		ウムミコノ	イミナタカヒト	生む御子の	イミ名タカヒト
		カミロギヤ		カミロギや	

語句の解説

・七代目→イサナギ、・シラヤマト→シラヤマとヤマトの重ね語、タカヒト→イサミギの諱、

・カミロギ(キ)→神漏岐、カミロキ→カムロキに同じ、キは男、男の神々の尊称

原文の現在訳

天の神代の　七代目お　継ぐ糸口は　常世神　木の実東に　植えて生む　ハゴクニの神　日高見の高天に祀る　御中主　橘植ゑて　生む御子の　タカミムスビお　諸讃ゆ　キ(東)の常立や　その皇子は天鏡神　筑紫治す　ウビチニ儲く　この皇子は　天萬神　ソアサ治し　アワ、サク生めば　アワナギはネのシラヤマト　チタルまで　法も通れば　生む御子の　イミ名タカヒト　カミロギや

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

天の神代の御世を途絶えさせることなく、初代の国常立～イサナギの七代目までお日継ぐ糸口は、常世神になります。常世神は、2アヤ(綾)3(1 行)～4(2 行)より引用しますと、国常立が建国した常世国(茨城県)に木の実を東に植えられて、生まれ初む皇子を、後にハゴクニの神と称えられました。

ハゴクニ神が成人されると、常世国の東にあたる日高見国を、国常立より賜われ、日高見の高天に御中主の神を祀られるのでした。そのハゴクニ神は、「昔、御中主の神が、木の実を植えられた」ことを

見習われて、橘を植ゑられて、生まれ初む御子の称え名を初代タカミムスビと称されました。

その頃から、日高見国も豊かになり、この初代タカミムスビの恩恵お享受された諸神より讃ゆられて、（初代タカミムスビは）「東の常立や」と呼ばれるようになりました。また、初代タカミムスビのその御子は、天鏡神と云い、月隅に天降りされて、国常立の意思を活かして見事に筑紫の国を治められております。

話題は、四代目のウビチニ、五代目のツノグイ、その次の六代目、オモタルよりもう一度、始めなくてはならないようです。六代目のオモタル、カシコネについては、先の2アヤ（綾）16（4 行）～19（1 行）【本文】で解説しましたが、オモタルの神、カシコネには、日嗣の継子が生まれず、家系が途絶えました。その理由は、23アヤ（綾）4（4 行）～8（1 行）を引用しますと、「オモタルの　民利きすぐれ　物奪う　・・（中略）・・　利き者斬れば　世継ぎなし　・・（中略）・・　恐るるは　無罪人斬れは　子種絶つ　げに慎めよ　天の神　嗣きなく政り　尽きんとす」とのことでした。

慌てたのは他でもありません。当時の天の原の重鎮（臣）たちは、緊急に集まり、先代のアマカミ（天神）の血筋より、日嗣に適任の皇子を見出されたことは容易に想像されます。その結果、二代前のウビチニの皇子たちの孫たちに白羽の矢たったようです。突然、ウビチニの話が出てきます。四代目のウビチニ、スビチニは、後の五代目のツノグイの皇子以外に、他にも皇子がいました。そして、その皇子は、筑紫の国を治められていた天鏡神の儲く（け）の子（養子の子）になられていたこの皇子は天萬神と云いました。

この頃、天萬神はすでに成人されて、ソアサに天降りされるや国を治めになって居られました。その天萬神は、アワナギ、サクナギの二人の皇子を生めば、その皇子のアワナギは、後に、ネ（旧、越前・越後の国）のシラヤマ（白山）のヤマト（都をヤマトと呼んだ）に天降りされて、チタル（千足・今の鳥取）まで治められて居りました。この甲斐があって、ネの国からチタルまで、法をもとにした政も通れば、アワナミが生まれ初む皇子のイミ名は、タカヒト（後のイザナギ）のカミロギ（神漏岐・男の神々の尊称。）と呼ばれる皇子になりますぞや

2アヤ（綾）3（1 行）～4（2 行）より引用すると、

カミその中に
生れました　国常立の
常世国　八方八降りの
御子生みて　皆その国お
治めしむ　これ国君の
始めなり

2アヤ(綾)16(4 行)～19(1 行)【本文】

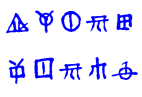
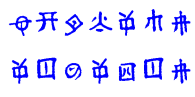
六代の継ぎ　　オモタルの神
カシコネと　　‥(中略)‥
‥(中略)‥　　及べと百万穂
継子なく　　道衰ひて
わいためな

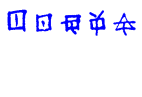
23アヤ(綾)4(4 行)～8(1 行)より引用すると、

オモタルの　　民利きすぐれ
物奪う　　これに斧もて
斬り治む　　斧は木お切る
器ゆえ　　金練人に矛お
作らせて　　利き者斬れば
世継ぎなし　　民の齢も
八万歳なれ　　食にもよれども
昔あり　　万鈴も減り
百歳より　　また万に増す
これ鈴お　　結ぶ神なり
恐るるは　　無罪人斬れは
子種絶つ　　げに慎めよ
天の神　　嗣きなく政り
尽きんとす

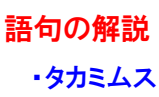
2アヤ(綾)25(2 行)～28(1 行)【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
			タカミムスビノ		タカミムスビの
		イツヨカミ	イミナタマキネ	斗五代カミ	イミナタマキネ
		トヨウケノ	ヒメノイサコト	トヨウケの	姫のイサコと
		ウキハシオ	ハヤタマノオガ	浮橋お	ハヤタマノオが
		ワタシテモ	トケヌオモムキ	渡しても	解けぬ趣き
		トキムスフ	コトサカノオゾ	解き結ぶ	コトサカノオぞ
		ケタツボノ	ツサノツクバノ	ケタツボの	西南の筑波の
		イサミヤニ	ウナヅキアミテ	伊佐宮に	頷きアミて
		イサナギト	イサナミトナル	イサナギと	イサナミとなる



フタカミノ　マシワルトキニ　両神の　交わる時に



トコミキヤ　トコハトホコニ　床酒や　床は瓊矛に


コオモトム　子お求む

語句の解説

・タカミムスビ→日高見国で初めて生まれた皇子、・イミナ→イミナ（諱）、・トヨウケ→玉杵・豊受神、
・イサコ→イサナミの諱（実名）、・浮橋→浮橋を渡す人（仲人）、
・コトサカノオ→谷のサクラウチより床酒の教を授された神、・アミて→.あひみる【相見】、
・玉シマ　→　「玉門・」（ツビ）・・陰門の古名。〔和名抄〕

原文の現在訳

タカミムスビの　斗五代カミ　イミナタマキネ　トヨウケの　姫のイサコと　浮橋お　ハヤタマノオが　渡しても　解けぬ趣き　解き結ぶ　コトサカノオぞ　ケタツボの　西南の筑波の　伊佐宮に　頷きアミて　イサナギと　イサナミとなる　両神の　交わる時に　床酒や　床は瓊矛に　子お求む

【疑問】

2アヤ（綾）25（2　行）～28（1　行）【本文】を読みますと、その中に「両神の　交わる時に　床酒や　床は瓊矛に　子お求む」との文章が記述されております。この文章は、「床酒や　＊＊＊＊＊　子お求む」の文章のように、子作りの話と思っておりました。そのことを裏付けるように、4アヤ（綾）20（1 行）～21（3　行）より引用しますと、「コトサカノオが宮に帰られると、初代ヤマスミ（谷のサクラウチ）が笹酒を勧めるや、話が男女の子作りの話になりました。谷のサクラウチは、「床酒知るや」と申され、これに対してコトサカノオは知らないと答えるや、床酒の道を尋ねました。そこで、谷のサクラウチは、その新婚の子作りのノウハウである「床酒の道」を教えられました。このように、床酒の話は、純粋に子作りの話かと思っておりました。

【床酒の例】

4アヤ（綾）20（1 行）～21（3 行）より引用すると、

宮に帰れは
ヤマスミが　笹酒すすむ
枯れ男神　床酒知るや
女の答え　コトサカノオが
道聞けは　床酒は先つ
女が飲みて　のち男にすすむ
床入りの　女は言挙げず

このような話であろうと推定される文章に対して、「両神の　交わる時に　床酒や　床は瓊矛に　子お

求む」との文章の中には、「床は瓊矛に」のような子作りを想定しない文章が挿入されているではありませんか。そのことは、更に、「床は瓊矛に」の後に続く文章が、なぜか、「床は瓊矛に　子お求む」になっていることです。なぜ、「交わる時の床に、瓊(ヲシテ)と逆鉾が必要なのか」です。甚だ、疑問のある文章になっているようです。これまでの瓊矛の記述でも、治世ために使用されておりました。

【疑問に応えて_(1)】

　そこで、当「瓊矛」の文章の使い方が、ホツマツタヱの他の使用例と違っていることが考えられます。そのため、更に、他のホツマツタヱのアヤ(綾)を捜しますと、「奉呈文一1」と「17アヤ(綾)24」に、「床は瓊矛に」の使用例が見つかりました。その例文は、「瓊矛に治む　民増して」と「瓊矛に治む　年経れは」です。その二つの文章を訳文しますと、「瓊(ヲシテ)と逆鉾、行政と司法を用いて世の中を治めた。その結果、民も増えてきた、また、その間の年代も経過した」と訳文ができるようです。また歴史性とストーリー性のある文章になっていることです。

　これに対し、「床は瓊矛に」を挿入された「両神の　交わる時に　床酒や　床は瓊矛に　子お求む」の文章は、「子作り」と「瓊(ヲシテ)と逆鉾、行政と司法」が併記されており、家庭的な文章の中に、社会性の文書が挿入されていることは、ホツマツタヱの文章を見ても変な構成文になっているようです。そのため、ストーリーに一貫性がない文章になっているようです。恐らく、「床は瓊矛に」の文章は、「誤植」で挿入された個所か、または、「言葉足らず」の文章になっているかと思われるようです。

【瓊矛に治むの例】

奉呈文一1より引用すると、

　天地の　　開けし時に
　両神の　　瓊矛に治む
　民増して　　アマテル神の

17アヤ(綾)24より引用すると、

　ことことく(悉く)　　天の御祖の
　賜物と　　守らぬはなし
　両神の　　瓊矛に治む
　年経れは　　ニブ(鈍)ナレ(並)トキ(利)の

【疑問に応えて_(2)】

　ホツマツタヱに記述されている「トコハトホコニ(床は瓊矛に)」の言葉について、「トコハ(床は)」と「トホコニ(瓊矛に)」を別々に分けて、それぞれが、ホツマツタヱにどのように記述されているかの例を抜粋して見ました。抜粋した結果は、トコハ(1件)、トホコニ(2件)、トホコ(7件)になります。その結果、「トコハトホコニ(床は瓊矛に)　コオモトム(子お求む)」などとするストーリー性のない変な文章はありませんでした。

トコハ（1件）

　ヤミヂノトコハ　アカリナス　（27アヤ（綾）37）

トホコニ（2件）

　トホコニヲサム・・・【疑問に応えて_（1）】にて、説明済。

　トホコニヲサム・・・【疑問に応えて_（1）】にて、説明済。

トホコ（7件）

　トホコニヲサム

　トトホコタマフ

　トホコノリ

　トホコアリ

　トホコニヲサム

　トホコモテ

　トトホコト　サヅケタマワル

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

　ハゴクニの神、初代タカミムスビより始まったタカミムスビの家系の五代のカミ（神）は、イミ名（実名）をタマキネ（玉杵）と云い、称え名をトヨウケ（豊受）と申します。そのトヨウケ（豊受）は、臣として、アマカミ（天神）の天成る道が成就するようにと尽力されました。

　そのため、後に、イサナギ、イサナミの天皇子のワカヒト（アマテル神）が生まれると、日高見において、ワカヒトの日嗣皇子の教育を施されました。そして、アマテル神の日嗣教育が終わるや天の真名井に遷られて宮津の越国を治められました。

　話は前後しましたが、そのトヨウケ（豊受）の神には、結婚適齢期の姫のイサコがいました。そのイサコ姫とイサナギ、イサナミの天皇子であるタカヒト（後のイザナギ）は、結婚の適齢期を迎えておりました。そこで浮橋（仲人）お申し出たハヤタマノオが、二人に別々に口上述べ、お互いの気持ちを申し渡しても、二人の心は結婚する気持ちまでは至らず解けぬ趣き（納得できない感じ）でした。

　そこで、二人の頑な心を解きほぐそうと、二人をよく知り、縁を結ぶコトサカノオが浮橋（仲人）に選ばれましたぞ。二人の見合いの場所は、常世国の中心地であるケタツボの西南の方向にある筑波山の麓の伊佐宮になりました。二人は、伊佐宮にて頷きアイミて（相見て）、結婚されることになりました。二人の称え名は、筑波の伊佐地方の名を取って、イサナギ（伊佐の男）とイサナミ（伊佐の女）となることを民に報告されました。

結婚された両神の新婚生活は、筑波山の麓の伊佐宮になります。両神は、オモタル、カシコネの例を云うまでもなく、子が授からないと家系の断絶も耳にされていたので皇子作りに励まれました。その子作りの方法は、ハヤタマノオが初代オオヤマツミ(谷のサクラウチ)より授かった「床酒の道」です。

その「床酒の道」をイサナギとイサナミに授けられました。二人は、徐ろに交わる時に床酒を頂かれました。床酒は先つ　イサナミ(女)が飲みてのちイサナギ(男)に勧められ、暫くすると、二人は少しほろ酔いになられるや　(床は瓊矛に)　子お求める初むの一夜を過ごされるのでした。

異聞の解説例

なお、(床は瓊矛に)を文中のストーリー性より訳文できませんでしたが、あえて、訳文しますと、「二人は、徐ろに交わる時に床酒を頂かれました。床酒は先つ　イサナミ(女)が飲みてのちイサナギ(男)に勧められ、暫くすると、二人は少しほろ酔いになられるや　床酒は、瓊(ヲシテ)と(逆)矛を持って、治世を治めるもとであり、そのためには、その治世を正しく治める良い天皇子を求める初むの一夜を過ごされるのでした。」

【　床酒の例　】

4アヤ(綾)20(1 行)～24(3 行)より引用すると、

宮に帰れは
ヤマスミが　笹酒すすむ
枯れ男神　床酒知るや
女の答え　コトサカノオが
道聞けは　床御酒は先つ
女が飲みて　のち男にすすむ
床入りの　女は言挙げず
男の装ゐ　女が知り嫁ぐ
下露お　吸えば互ひに
打ち解けて　玉シマ川の
内宮に　宿る子種の
嫁ぎ法　子お整ふる
床酒は　国生む道の
教ゑぞも　かく交わりて
妊めとも　十月に生まず
年月お　経れともやはり
病めるかと　心痛めて
九十六月　やや備わりて
生まれせる　アマテル神ぞ

2アヤ(綾)25(2 行)～30(3 行)【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
		ササケハトコヨ		酒は常世	
		丰ノクチノ	スクナミカミノ	丰の口の	スクナミカミの
		タケカブニ	ススメガモミオ	竹株に	雀が籾お
		イルオミテ	ミキツクリソメ	入るお見て	御酒造り初め
		ススメケリ	モモヒナギヨリ	勧めけり	モモヒナギより
		ササナミト	ナオタマフヨリ	ササナミと	名お賜ふより
		ナモササケ	ソノカミイマニ	名も酒	そのカミ今に
		ササケヤマ	ココノクミトハ	ササケ山	九の酌みとは
		ヤヨイミカ	サカツキウメル	弥生三日	盃ウメル
		カミノナモ	ヒナガダケトゾ	カミの名も	ヒナガダケとぞ
		タタユナリケリ		称ゆなりけり	

語句の解説

・常世→永遠、・丰の口→猪口→盃、・酌み→水などをくむこと。、・九の酌み→三三九度の盃、
・入る→入れる、・ウメル→熟める。うむい・る、・【熟】→果実などが熟す・称ゆ→称える。ほめていう。
・ヒナガダケ→(現)日野山。奥の細道には、比那が嵩と詠まれている山。

原文の現在訳

酒は常世　丰の口の　スクナミカミの　竹株に　雀が籾お　入るお見て　御酒造り初め　ス勧めけり　モモヒナギより　ササナミと　名お賜ふより　名も酒　そのカミ今に　ササケ山　九の酌みとは　弥生三日　盃ウメル　カミの名も　ヒナガダケとぞ　称ゆなりけり

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

イサナギ、イサナミは、コトサカノオが、床酒として準備されたお酒を召し上がられました。二人は、この不思議な飲み物に少し驚かれました。飲酒されるや、酒が醸し出す夢心地の常世の雰囲気は、イサナギ、イサナミを永遠の二人の世界に誘ったようです。

その丰の口の酒の作り初めは、古くなりますが、ウビチニの頃のスクナミ神が里山の竹藪で、切り倒されて残った古い竹株に雀が、秋の田畑に落ち溢れたわずか籾お、くちばしで啄み入れているのお(を)見て、御酒造りの初めを思いつかれたとのことです。そして、ウビチニは、スビチニに御酒造りを勧めけり。(勧められました。)その後、スビチニは、御酒造りに精通しモモヒナギ(ウビチニ)よりササナミとの名お賜ふ(われました。) これより御酒の名もササケ(酒)と名付けられたとのことです。その御酒の神のササナミは、今にしてもササケ(酒)山と呼ばれております。

そして、現在の儀式に残る三々九度の始めは九の酌みと云い、その本おりは、弥生の三日に、2アヤ(綾)10(3 行～4 行)【本文】より引用しますと、「弥生三日　御酒造り初め　奉る」と記述しており、桃(モ)の木の下(モト)で行われた、ウビチニ(モモヒナギ)、スビチニ(モモヒナミ)神のご結婚の祝いに持ち出されて、杯を傾けて御酒を酌められたことに由来するとのことです。その盃を埋められるモモヒナギとモモヒナミの神の名も　ヒナガダケ(福井県の比那が嵩)とぞ　称ゆなりけり　(称えられました。)

2アヤ(綾)10(3 行～4 行)【本文】より引用すると、

弥生三日　　御酒造り初め

奉る

(2アヤ(綾)　終わり)